ゼルダの伝説　時のオカリナ

栖紗 ヒロト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼルダの伝説　時のオカリナ

【Ｎコード】
Ｎ５６２４Ｇ

【作者名】
栖紗　ヒロト

【あらすじ】
ここはハイラル王国の東、コキリの森。その深き森から微かにオカリナのメロディーが流れてくる……。それは誘う為なのか、その答えは誰も知らない……。そして、一人の少年が現れた。その深き森から来たという……、片手にオカリナを携えて……。

プロローグ

ナビィ……。

妖精ナビィ、どこじゃ……。

ここへ、おいで。

……、おぉ、妖精ナビィ……。

このワシの……、デクの樹の言葉を聞いておくれ……。

お前も感じておろう？　この世に満ちた、悪しき力を……。

今、ハイラルはその力に飲み込まれようとしておる……。

このコキリの森は、命の源……。人の侵入を拒むことで、外の世界をも守ってきた……。

しかし……。

この強大な悪しき力の前では、今のワシは、まったくの無力……。

どうやらあの妖精を持たぬ子が、立たねばならぬ時がきたようじゃ。

あの子こそ、このハイラルを善き方向へ、導く者……。

さあ、ナビィよ……。

あの子をここへ、誘うのじゃ……。

ワシに残された時間は、もう……、多くはない……。

たのんだぞ……。

そびえ立つ巨大な出で立ち、そう、デクの樹様。深き森の奥地、コキリの森から数多の時間を費やしながら、このハイラルを傍観してきた。

だが、生きとし生ける者には必ず終わりはくる。

……死。

デクの樹様でさえ、例外ではない。それが自然の摂理なのだ。

だが、今、その全てを壊そうとする者、そう、悪しき存在が現れた。

その悪しき者の前では無力と悟り、今、小さき勇者に託そうとしている。

ハイラルの希望を……。

ナビィは、静かにそして事の重大さを身にしめながら聞いていた。

……小さき妖精の光が一瞬、絶望の色に染まった。デクの樹様の死期は残りわずか、おそらく……。絶望と不安の中、ナビィはデクの樹様のいう、小さき勇者に賭けるしかなかった。

たのんだぞ……。その一言は重いものだった。だが、自分を奮い立たせるように大空に舞って行った……。

1話【冒険の始まりへ……】

ナビィはひたすら小さな勇者、リンクの家を目指して飛んでいる。

急がなきゃ…、デクの樹様へと続く細道を抜けると、瞬く間に視界が広がった。

そこにはコキリ族の住居が点在しており、その住人は皆それぞれのことをしている。高台から辺りを見回している者、家の前を掃除している者。

だが、全てのコキリ族には共通するものがある。風貌は年齢でいうと8、9歳といったところか、全ての住人が子供の姿なのだ。そしてデクの樹様が言ったようにそれぞれ自分だけの妖精を持っている。

ただ一人を除いて……。

途中でコキリ族の女の子に挨拶など声をかけられたりしたが、急いでいたナビィは軽く挨拶を返す程度でリンクの家へと急いだ。

……あ、見つけた。コキリの森の入り口で迷っていたナビィ。近くにいた女の子にリンクの家はどこかを聞いたところ、答えはすぐ返ってきた。

あの家だよと指を差して教えてくれ女の子に感謝しながら、リンクの家に一直線に飛んだ。

しかし、彼女は心の中で焦っていたのかもしれない。いや……、焦って当然だろう。あれほど話聞いたのだから……。

キャっ、小さな叫び声をあげた。慌てるあまり、木の大きな柵にぶつかってしまったのだ。

何やってんだろう、私。……、は、はやくリンクのお家に行かなきゃ。

激突とまではいかないがぶつかったことで少し落ち着くことができたナビィは、柵を越えてやっとのことでリンクの家にたどり着いた。

スー、スー、リンクは深い眠りに満たされて寝息をたてながら寝ていた。

「リンク！　ねぇ、起きてよリンク！」

ナビィはまたぶつかるのではないかという程の勢いで入ってきたのも関わらず、間髪入れずにリンク起こしにかかる。

……、リンク無反応。

何も反応がないことに少々腹立たしくなるが怒ってもしかたないと自分に言い聞かせながら、再度、

「リンク！　デクの樹様が呼んでるの。お願いだから起きて！」

少し怒張も混ざっていたがそこは彼女の愛嬌で。しかし、そんな彼女の期待に見事に裏切った。

やっとのことで反応を示したリンクを見て、安堵のため息が出た。さぁ、デクの樹様のところへ……と言うつもりだったのだが、肝心のリンクはただ寝返りをうつだけであった。

流石のナビィもこれには、

「う～～ん、もぅ！　リンク！！」

感極まってリンクの周りを不規則に旋回し始めてしまう。

ホントはぶつかって起こしたいのだが、それでは自分にも被害を被るのでやめていた。そういうところは意外と冷静であり、この先の冒険でその冷静さに助けられることにリンクはまだ気づいていない。今は、起きてもいないが……。

まったく……。こんなねぼすけがハイラルの運命を握っているなんて、ホントかしら……？

無理もない。ナビィが来てからゆうに5分は経過しているだろうか……。

デクの樹様の話を聞いて不安でいっぱいだったのだが、今のリンクを見ていると違う意味で不安でいっぱいになる。

……ん、ふぁ～～ぁ。ナビィが先が思いやられると呟き始めた頃、やっとの事でリンクが背伸びをしながら起き上がった。

「あ、あれれ……？　君はだれ！？　ここ、こ、ここは僕んちだよ」

目を大きく見開いたかと思った次の瞬間、ザザッ。思わず後ずさりをしながら怯えたように声を出す。

……、情けない…。

リンクの第1印象だった。ナビィは無意識の内に深くため息をついてしまう。

「はぁ～……、やっと目が覚めたのね？　ワタシ、妖精のナビィ。だから、落ち着いてリンク」

怯えていたリンクを落ち着かせるため、そして自分を落ち着かせるためにゆっくりと喋り始めたナビィ。

そんなことも露知らず、妖精？　なんで僕に？　少し落ち着き興味を示したのか、ベッドに腰掛けてナビィの方に目を向けながら問う。

「い～い？　デクの樹御命令でこれからワタシがアナタの相棒よ」

相棒。リンクはその言葉を聞いた瞬間、言葉では言い表せないほど歓喜の表情で満ち溢れていた。飛び跳ねたり、あからさまに喜んだり大きな意志表示はしなかったがすごく嬉しい。なにせ、妖精がいないことであるグループからイジメを受けていたからだ。

「こ、これからよろしくね、ナビィ」

初めての相棒に出来る限りに大きな声を発しようとしたが、どこか恥ずかしいのか俯き加減で言った。だが、リンクなりに頑張った方である。

ナビィはよろしくねと手早く言い、

「デクの樹様がお呼びよ！！　さあ、一緒にいきましょ」

心の中では大はしゃぎのリンクに急かすように本来の目的を言い始めた。

何の用なんだろ……？？　少し考えていて自分の世界に入ってたが、入り口からのナビィの呼びかけで早々と舞い戻る。待ってよ～、急いで自分の家を後にした。

§

「ヤッホー、リンク！」

家から出てすぐに声が聞こえてくる。声がする方向に目を向けると深緑色の髪をした少女が走ってきていた。サリアだぁ、自分の１番の友達がきたことに気づき、手を振りながら呼びかけに答えた。

「わぁ～っ、やっと、リンクのところにも妖精がやってきたんだ！」

自分と話をするため、家のハシゴを降りてくるリンクに妖精がいることに気づいて言う。

うん、トンと着地し降りてきたリンクは、はにかむんだ笑顔で頷いた。自分の妖精にすぐ気づいてくれたことも少し嬉しかった。

「良かったね、リンク。なんだかサリアまで嬉しくなっちゃう」

サリアは、手を胸の前で合わせながら本当に嬉しそうに言った。

やはり、リンク自身が言うように1番の友達というのもうなずける。引っ込み思案があるリンクは妖精がいなかったこともあり、自分の晒すことが中々できないでいた。しかし、サリアといるときは素の自分で居られる。それほど特別な存在なのだ。

「これでリンクも立派なコキリ族の仲間よね！」

リンクは手を後ろに回してそうだねとちょっと自慢気味に答えた。フフフッ、サリアも口を抑えて笑みを浮かべた。

しばらく談笑していたリンクにナビィは、ちょっとリンクと囁きながら、目的を思い出させた。

「ごめんね、今からデクの樹様のところに行かなきゃいけなんだ…。なんか呼ばれちゃって…」

楽しい会話を途切れさせたことに謝りながら、申し訳なさそうに言う。なぜ呼ばれたか本人も不安になっていたが、

「スゴいじゃない！　デクの樹様とお話しできるなんて」

サリアの笑顔を見ていると自然と不安が消えてゆく。

「ワタシ、ここで待ってるからデクの樹様の所へ行ってあげて」

「うん、ありがとう。んじゃ、行ってくるね～」

リンクは家の中で待っててもいいから～と言い残し、サリアと一時別れた。

途中で家の前の掃除を手伝わされそうになったが、ごめんと手短に言うとダッシュで駆けていった。後ろでケチ～～っと叫ばれていたのを気のせいにして。

ウワワワッ、リンクはデクの樹様へ向かうために通る細道の近くまで来ていた。しかし、その細道の入り口で立っている人物を見かけると思わず、怖じ気づいてしまった。

彼の名はミド。リンクをいじめているリーダー的存在だ。当然ながらリンクにとっては苦手である。だが、デクの樹様に呼ばれている以上、そこを通らなくてはならない。

ましてや、くる途中にヘアバンドをしている子に聞いたのだが、デクの樹様は森の守り神であってコキリ族の生みの親でもある。その偉い方に呼ばれているのだから必ず行かなくてはならない。

リンクは最大限の勇気を振り絞って、

「あ、あの～。ここを通ってもいいですか？」

「なんだ、妖精なし。デクの樹様に何の用だ！！　妖精のいない半人前のくせに……、さっさと帰れ！！」

ミドはいつもようにリンクをそう呼んだ。妖精なしと。だが、今

違う。

「……、ち、ちがうもん！！よ、よく見てみてよ」

今までなら泣くだけであったが、今回は言い返せた。まぁ、多少涙目で言い返すまで時間がかかったが、今はナビィという存在がちょっとリンクを後押ししていた。

リンク……、さっきまで情けないと思っていたナビィは少しだけだが、見直していた。

ミドは初めて言い返しきたリンクに少々面食らったがすぐにあることに気づくと、あれっ……と声をあげた。そして、

「い、いるじゃん……、妖精……」

驚きを隠せなかった。当然だ。先ほど述べたが、デクの樹様は森の守り神であるからでして呼ばれることは大変に名誉なことであって、ミドも知っていた。リンクは知らなかったが……。

「なんでだよ！！　なんでこのミド様じゃなくてお前なんだよっ！！」

自分を様付けしていることからミドはプライドが高かった。それを証拠におっもしろくね～っと鼻を鳴らして地団駄を踏んでいる。だが、何か思いついたのか、呆然としていたリンクに、

「オイラは認めねぇぜ！！　だいたいまともな装備もしてないじゃんか！！　剣と盾ぐらい持って行かなきゃ、何かあった時お手伝いなんてできないぜ」

と、言い放った。まぁ、俺も持っていないながなと後ろを向きながら言ってはいたが、今のリンクには聞こえていなかった。なぜなら剣はコキリ族とって大切な秘宝であり、その行方も定かではないとサリアから聞いていたからだ。

ど、どうしよう……、リンクはそう呟きながら歩いていた。デクの盾はお店から買うことで手にすることはできたが、剣の所在はまだわからなかった。

「リ〜〜ンク〜」

下を向いていたリンクは急な呼びかけに慌てた。え、ど、どこ？　どこから声がしたの？　リンクはわけがわからず辺りをキョロキョロ見回していたが、クスクスっと上から笑い声が聞こえてきた。

§

「ん〜、剣ねぇ。たしか練習場の近くにしまってあるって噂聞いたことあるよ」

リンクは思わず、ホント！！と目を見開いて聞き返してしまう。先ほど、リンクを呼び止め少女のところまで行き、話をしていたところだ。

うん、噂だけどねと言うがリンクはかなりの勢いで信じこんでいた。

練習場はミド達の縄張りで皆、あまり近づけない。リンク自身も

実際に行ったことがなかった。ちょうど自分がいる高台から練習場が見えるだが、運がいいことに誰もいない。

チャンスと言わんばかりにリンクは練習場へと急ごうと走り始めたが、肝心なことを忘れていた。

ここは高台の上、見事に落ちてしまった。挙げ句の果てにフギャっと情けない声をあげてしまい、上から大丈夫？と心配する始末。前途多難である。

練習場で見つけた小さな穴に入ってちょっと広い広場に来ていた。

「なんか変な音がしない？」

先ほどの小さな穴で怖いよ～……と、怯えていたリンクに喝を入れながらも周りを照らしてくれたナビィは妙な音に気がついた。

ゴロゴロ……、たしかにリンクの耳にも聞こえていたが、ちょっと先の方にある宝箱に目がいった。

……あった。絶対あの中に剣があるんだ！！　ナビィの静止の声も聞かずに一目散に宝箱へと走り出した。

だが、突然宝箱が見えなくなった。そう大きな岩が道を塞いでしまったのだ。

「危ない！！　逃げて、リンク！！」

ナビィの叫ぶまで恐怖で呆然と立ちつくしていた。来た道を全力疾走で戻ったのだが、あまりにも突然の出来事でリンクはパニック

で道を間違えしまった。

うわ～、助けて～！！　必死で走って何分経つだろう。依然パニック状態のリンクとは裏腹に冷静なナビィはあることに気がついた。戻ってる……？　ようやくここの地形を理解したナビィは、

「リンク！！次の曲がり角、左！！」

「え…。う、うん」

リンクは言うとおりに曲がり角で左に横っとびした。すると視界に飛び込んできたのは先ほど入り口から見た、大きな宝箱だった。

§

「デクの樹様のところへ行きたきゃ……、あれ？　デクの盾あるじゃん。……あぁ！！　そ…、それはコキリの剣！！　ちっくしょーっ！！」

剣も入手したリンクはニヤニヤしながらミドを見ていた。なにせ自分の力で見つけてきたのだから。負け惜しみを言ってるミドをみながらナビィと笑いあった。

「フンッ。いくら剣をつけていても弱いヤツは弱いんだよ。俺はぜってぇ認めねぇからな！！」

なんでサリアもデクの樹様もコイツなんかを……、ブツブツと言いながらも道を譲ってくれたミドに小さくありがとうと言い、リンクはデクの樹様のところへ向かった。

これから起こるであろう過酷な冒険がリンクを待ち受けているのか……。気分よく鼻歌を歌いながら待っているデクの樹様へと向かっていった……。

2話【知恵と勇気……と希望？】

デクの樹様へと続く細道を歩いているリンク。カチャッカチャッと歩く度にコキリの剣が鳴いている。久しぶりの戦いに飢えているのだろうか……。

この呑気に先ほど手に入れたデクの棒を振り回しているちっぽけな主人と共に……。

「デクの樹様……。ただ今、戻りました！！」

デクの樹様が見える所まできたナビィは、早々と自分が帰還したこと伝えて始めた。

遅れて到着したリンクは、うわぁ～と呆けにとられているような声で巨大な樹木、デクの樹様を見上げていた。

「おぉ……、ナビィ……戻ったか…。そしてリンク……、よく来てくれた…」

巨大な出で立ちとは裏腹に細々とそして静かに語り始めた。

「森の精霊である……、このワシの話を聞いておくれ……。リンク、お前は最近、毎日のように恐ろしい夢を見ているはずじゃ……、その夢は、今この世界に忍び寄る邪悪な気配そのもの……。お前は、

それを感じていたのじゃ」

当たってる……。ゆっくりとした口調で語りかけてくるので膝を抱えながら座っていたリンクは、デクの樹様の指摘に驚いた。ナビィにホントなの？　と聞かれたのだが当たっていたこともあり、慌ててコクコクっと何度も頷き返した。

やはり勇者だからなのかしら……。ナビィはその答えを詳しく聞こうと振り向いたが、

「リンクよ……。今、ここでお前の勇気を試させてほしい……」

と、遮られた。そして続けざまに語り始めた。

「ワシは呪いをかけられておる。お前の知恵と勇気で解いてほしいのじゃ……。その覚悟があるかな……？」

デクの樹様のその問いにリンクはかなり怯えた様子で迷っていた。

えぇ～、どうしよぅ……。ぼ、僕には無理だよ……。怖いし知恵なんか持ってないもん……。で、でも、此処で断ったらまたミドにイジメらちゃうしサリアもがっかりするだろうなぁ……。あんなに喜んでたし……。

そんなちっちゃくなって悩んでいるリンクを見ていたナビィは深くため息をついていた。

「どうしたのじゃ……、リンク…。覚悟はあるか？」

「あります！！」

これじゃ、先に進まないわ……と思ったナビィは、二度目の問いに答えた。そう、返事したのナビィである。リンクはというと驚愕な表情でこちら見ていた。正に空いた口が塞がらない状態だった。

「よろしい……、ではリンクよ。ナビィと共にワシの体内へ入るがよい……。妖精ナビィよ……、リンクの力になれ……」

えええ～！！　ぼ、僕、返事してないのに～。しかも、なんかスルーされてる……。

リンクそっちのけで話が進み、行くこと決定。

「ほら行こう、リンク」

「ま、まだ行くって言ってないよぉ～～」

リンクは引きずられながらデクの樹様の中へと入っていた。

やれやれ……。

自分の体内へと誘った張本人が大きくため息をついていた……。

2話【知恵と勇気……と希望？】（後書き）

今回は短い話になってしまいました……。一応、ダンジョンの方も書きたいので読んでいただいてる皆様には申し訳ないないですが、今回はここで区切らせていただきました。次話は一応長め予定……のはずです。

3話【緊迫の連続】

「いつまで泣いてるのよ……、リンク。しっかりしてよね、もう……」

ナビィの言う通り、リンクは泣きながら歩いていた。

「グスン……、だってぇ、だってさぁ…。僕まだ決めてなかったのにさぁ……」

この先ホント大丈夫なのかしら……。そう思っていた頃、デクの樹様の中心部まで2人は到達していた。中は空洞化しており、至る所に蜘蛛の巣が張り巡らされている。ナビィは初めて入るデクの樹様の体内を注意深く観察していた。

「ねぇ、リンク。こんなにたくさんの蜘蛛の巣、ちょっと変じゃない？」

振り向いて聞こうとするが先ほどまでそこにいたリンクがいなくなっている。

あら、どこ行ったのかしら？　リンクがいないことに気づき辺りを見回すと、意外にも探している人物はすぐそこにいた。

ん～～、こんな植物、コキリの森にあったかなぁ？　小さな植物の前でしゃがみ込んでいたリンク。

やはりまだ子供であるために好奇心旺盛で先ほどまで泣いていた

のはどこへやら……。

だがここは、コキリ族の住居がある森と違う。何者がかけた凶悪な呪い、魔物の巣窟となっている。いち早くその危険を察知したナビィは、

「危ない！！　リンク、逃げて」

興味津々で観察していたリンクに向かって叫んだが、すでに遅かった……。ん…？と、突然の呼びかけに反応を示すリンク。どうかしたの？と言おうとナビィの方にゆっくり振り向いたその時、突然背中に衝撃が走った。大きな衝撃だったが運良く背負っていたデクの盾が防いだため、フギャっと言いながら前へと弾き飛ばされただけで済んだのだ。

弾き飛ばされ、何がなんだかわけがわからないリンクはここにいて危険と咄嗟に思い、待って！！と叫んでいるのも聞く耳持たず、静止を振り切って目の前のツタを登って行った。

ハァ～、ハァ～、い、今のは何だったんだ……。登りきった所で呼吸を整えながらさっきの一瞬のこと思い出していた。

「今のはデクババよ。遠くからは普通の植物にしか見えないけど近づくと襲ってくるのよ」

「じゃあ、さっき僕が見ていた植物って……」

「そうよ。それよりリンク、此処がどこなのかわかってるの！？」

呼吸もまだ荒いリンクは、いきなりの怒張のこもった声にたじろ

いだ。デ、デクの樹様の中でしょ？と怯えながらも小さな声で反論したが、

「そうよ！！　でもね、今は強力な呪いがかかってて此処は魔物の巣窟なの。あなたはその呪いを解かなきゃいけないのよ、わかったらもうちょっとしっかりして！！」

リンクの不甲斐なさにナビィは強く当たったしまった。ハッと自分が言い過ぎことに気付いたが、今さら謝ることすらできない。

怒られた本人はというと予想通り、ひどく落ち込んでいた。そして恐怖心を抱いていのだが、それは魔物への恐怖でなかった。

うぅ……、ナビィに嫌われちゃった……。せ、せっかく僕にも相棒ができたのに……。

恐らくこれから会うだろう未知なる魔物と対峙すれば怯えはするだろう。だが、2人でいるからこそ恐怖までいかないのだ。もし、1人ならば……。リンクは無意識のうちにわかっていたのかもしれない。ここで1人になることは命とりになること、そして友達という相棒を無くしてしまうことを……。

だが、今はあくまでも無意識の内だ。まだ落ち込んでいるリンク。ナビィが弱々しく、

「……、ねぇ。あっちに扉があるから行ってみよう……」

と言い、扉の方へと行くのをただついていくだけだった。少なからずナビィも元気はなかったが、リンクはそんな事すら気付けずにいた。

バタンと扉が閉まると同時に鈍く輝く重量感のある鉄格子が落ちてきた。

あ……と声を上げたがすでに遅かった。自分がこの部屋へと導いといてこのようなことになってしまうとは……。今度はナビィが落ち込み、そして焦っていた。

私がなんとかしなきゃ……。そう思うと部屋を詮索し始める。リンクはただ呆然と部屋の中央部分を見つめていた。先ほど入ってきた時、ナビィは鉄格子の方に気がいっていたがリンクは中央の草木の部分がわずかに動いたのを見逃さなかった。

あれ？　さっき一瞬動いたよね……。何だろう一体……。デクババの件もあってか今度は慎重に近づいていった。

するとタコのような口をした木、デクナッツが飛び出してきた。……、しばらく見つめあった後にそれほど近くにいなかったリンクに狙いを定めると、その少し大きな口から実のような物を吐き出した。

うわわぁ！！　多少離れていたのだが突然の事に逃げ出すこともできずに盾を持って拝むようにその場にしゃがみ込んでしまった。

だが、その行動が功を奏したのかカツンと堅い樹木特有の音と共に実がデクナッツの方へ跳ね返っていった。

「リンク！！　早くデクナッツを捕まえて！！」

リンクの悲鳴に気がついたナビィは当たって飛び出してきたデク

ナッツを捕まえるように指示を促す。

へ？　何のこと……？ガタガタと震えながら先ほどの姿勢を保っていたが、どこからかナビィの呼びかけが聞こえてきた。盾の上部の方からそっと覗いてみるとデクナッツがぴょんぴょんと部屋の中を飛び跳ねまわっていた。

２度目の呼びかけでやっと反応したリンクは巣らしきに戻ろうとするデクナッツをダイブ気味で捕まえた。

「痛いッピ！！　カンベンッピ！！　この先にあるボクの大切なお宝をあげるから許してほしいッピ……」

早々と喋り始めたデクナッツは宝の部屋の方角を教えるとそそくさと部屋を出ていった。ついでに鉄格子も解除され来た道へも帰れるようになった。

「よくデクナッツの対処方法わかったね。実を盾で弾き返しちゃうなんてぇ……」

気付くとそばまで来ていたナビィが感心するように語りかけてきた。まぐれだったんだけどなぁ……、今さら偶然とも言いづらいこともあり、お手柄ということにしとくとしよう。

ナビィとの気まずい雰囲気も少しずつだが解けてきたリンクは気分よくお宝がある部屋へと向かった。

§

デクナッツのお宝、妖精のパチンコを手に入れたリンクは、自分の上達ぶりを披露していた。

「ナビィ、見ててね」

入り口のある中心部の部屋まで戻ってきていた。リンクはツタの上層部にいたスタルウォール目掛けてデクの種を飛ばした。弾は見事に当たってボトッと落ちてきた。

「スゴ～イ。上手くなったね」

手に入れて間もないのにすでにかなりの域のレベルまで達しているリンクを見て少しは見直していた。3匹ほどいたのだがもうすでに撃ち落としている。

……あれ？　よく見てみるとツタは上の階へと繋がっている。真下から気づきにくいし、先ほどはただ通り過ぎただけなので今となってようやく気付いた。

「リンク、あのツタから上へ行けるみたいよ」

他に的になるような物を探していたリンクにナビィは言う。元から木登りが好きで高い所は割と平気なリンク、じゃあ行ってみよう～と片手を挙げて意気揚々と更なる階へと向かった。

日頃からツタ登りはしていることなので難なく上へと登っていく。

「頑張って～、あともうちょっと」

横で応援をしているナビィ。最初の頃の気まずさは完全に消えて

いた。その証拠にリンクも満面の笑みで頷き返した。よそ見しないの！！　と一喝入れたが……。

ようやく最上階へ到着した2人はまず至る所にある蜘蛛の巣に目がいった。うわ～、蜘蛛の巣いっぱい……、ちょっと怖じ気づくリンク。量が量だけに触れないように歩き始めた。だが、2人はまだ気付いていない……。白の斑模様から覗いている魔物を……。

しばらく歩くとある場所を発見した。一部分だけ、蜘蛛の巣が途切れており高台のように少し太い枝が飛び出ている。最初に気づいたナビィがその場へ向かう。リンクも続いて向かった。

「うわ～、高いね。入り口があんなにちっちゃく見えるよ……。こんなところから落ちたら死んじゃう……」

今まで経験したことない高さに少し身震いをするリンクは、しゃがんで下を見ていた。

「……！！！　リンク！！」

ナビィの呼びかけに反応するとナビィが向いている視線の先、後方に目を向けた。そこには先ほどのスタルウォールより2倍ほど大きい、大スタルチュラが静かにこちらを見ていた。

リンクは即座に得意のパチンコで大スタルチュラを射抜いたのだが振り子のように振り揺れるだけであった。

「何やってるの！！　早く構えて！！」

何度も弾を打ち付けているリンクにナビィは叫んだ。そう、振り

揺れられながらも大スタルチュラは近付いてきていた。リンクは震えながらも剣と盾を手にした。

なぜ震えているか、パチンコは遠距離系なので敵とはかなり距離をあるいは間合いを取って攻撃ができるが剣はそうはいかない。どうしても敵と対峙して近距離からの攻撃になってしまうのだ。まして敵と対峙しながら剣を持つなどリンクは初めてだった。

怖いよ……、どうしよう……、怖いよ……、どうしよう……。リンクは同じことを心の中で何度も叫んでいた。そうしている間にも敵は近付いてくる。

ピタッ。急にスタルチュラは近づくのを止め、その場に立ち止まった。あまりにも急なことにリンクはつられて攻撃を仕掛けてしまった。うわ～と叫びながら……、だが勝負は見えていた。

ガキーン、高い金属音を経てながらコキリの剣は宙を舞った。リンクが攻撃をするや否やスタルチュラは体を回転させカウンターとも思わせる攻撃を仕掛けきていた。ダメッ、ナビィの一瞬の静止のおかげで敵の攻撃は免れたが剣は下の階へと落ちていった。

絶体絶命……。

その言葉は今の状況にピッタリだった。どうする……、どうする……。デクナッツ戦と同じくうずくまって盾を突き出し、泣いているリンクをよそにナビィは必死で考えていた。前に行けば敵、後ろに行けば落ちてしまう……、どうすれば……！！！　後ろに目をやり飛び降りれない高さを再確認するナビィはあるものを発見した。

「リンク！！　飛び降りて！！　下の蜘蛛の巣目掛けて！！！」

……、えぇぇぇ～、こ、この高さから！？　たが、迷っている時間はなかった。なぜならここから脱する方法はそれしかなかったからだ。それはリンクもすぐに理解する。

大スタルチュラに弾をぶつけて短いながらも時間を稼いだ、飛び降りる決意を。

よ、よし！！　やるしかないんだ！！　で、でも怖いよ……。やはり多少怖じ気づいてしまったが、大きく深呼吸する。横から早く！！　と叫ばれていたがリンクは自分を落ち着かせていた。少なからず成長した証だ。

よし、1、2の3で飛ぼう。……1、2の……、

「早くしなさいよ！！」

うわ～～～、自分のタイミングとはかなりズレて飛び降りてしまった。それもそのはず、後ろからあまりにも飛び降りるのに時間がかかっているリンクを見ていたナビィは我慢の限界に達し後ろから押したのだ。

……ありゃりゃ、僕死んじゃうな……。真っ逆様に落下しているリンクは意外にも冷静だった。走馬灯のように今までのことを思い出す……。あぁ…、短い人生だったなぁ……。

ゼルダの伝説　時のオカリナ　Ｆｉｎ……？？

バスッ。落下地点が丁度、蜘蛛の巣であったためお話は終わらないよ（ｂｙ　作者）

た、助かった……。リンクは安堵のため息をついていたのもつかの間、あまりにも高い所から落下してきたため、蜘蛛の巣もその衝撃に耐えきれずブチブチッと音を発しながら破れていった。

ドッポーン。蜘蛛の巣の下は水路があり、水底が深い所に落下した。

「……ご、ごっめ～ん、リンク。大丈夫？」

プハッと言いながら浮かんできたリンクに先ほどのことに謝りを入れた。濡れていてわからなかったが涙目でナビィを睨んでいた。

「……あ、あれを見て！！　コキリの剣があんな所にあるわよ」

スタルチュラとの攻防の中で落としてしまったコキリの剣が段差の上の地面に突き刺さっていた。ナビィに今の態度を気付いてくれなかったため、ふくれ気味だったリンクだが大切な剣が見つかったことすぐに忘れた。

……え…。剣を取りに行こうと水路から上がった所で立ち止まってしまう。

剣が突き刺さっている場所の近くに先ほども見た小さくなってい

るデクババがいたのだ。……、やっぱり取りに行かなきゃダメだよね……。俯き加減で呟いていたリンクを見かねていたナビィは、

「リンク……、あ…そうだ。たしかデクババは攻撃を受けると少しの間動きが止まるはずよ」

と、ふよふよとリンクの周りを漂いながら言う。助言を聞くと即座にパチンコを構えながら歩を進めた。

ナビィのアドバイスを参考したリンクの作戦は、その１　攻撃が当たらないギリギリまで近付く　その２　隙をついてパチンコで射抜く　その３　怯んでいるうちに剣を取る　その４　ダッシュで逃げる、だった。そうと決まれば気持ちが変わらないうちにと思い、更に近づく。

ようやくデクババも気付きこちらを見ながら威嚇している。リンクはいつでもガードできるよう片手に盾を持ちながらゆっくりと歩を進める。

……まさに一瞬の出来事だった。茎を目一杯伸ばしながらデクババは素早い攻撃を仕掛けてきた。驚いて少し後退してしまったが攻撃は当たらなかった。

今よ！！　の掛け声と同時にゆっくりと最初の体勢に戻ろうとするデクババをパチンコで射抜いた。ナビィの言うとおり直立しながらデクババは怯んでいた。

リンクはそれを確認するや否や剣に向かって猛然とダッシュしたところまでは作戦どおりだったが、あまりの勢いでつまづいてバランスを崩してしまう。その光景を見て、即座に助けに行こうと思っ

たナビィだが次の瞬間目を疑った。

剣を取ったものの前のめりにバランスを崩していたリンクは、両手を広げてバランスを取りながら倒れるのを拒否した。だが、剣を持っている左手が伸ばした先にあったのはデクババの茎だった。茎を切られたデクババはグガガァと絶命する声をあげた。

バッシャーン、勢い余ってまた水路に落ちてしまった。だが、先ほど落下してきたところより浅くリンクは大きな音をたてながら尻餅をついていた。イテテテっ、尻をさすりながら立ち上がると近くにデクの棒が浮かんでいるのを発見したのであった。

§

リンクは次の部屋へと来ていた。先ほどの部屋で蜘蛛の巣に火をつけるという方法に悪戦苦闘しながらもなんとかここまでたどり着いたのだ。

「ねぇ、ナビィ。あれってさっきもあったよね？」

リンクが指を指す方向に目を向けたナビィ。そう、デクナッツだ。先ほどは奇跡的に倒したヤツだが対処方がわかれば怖くない。デクナッツは実を吐き出してきたが余裕で盾を構えて弾き返した。

これも先ほどと同じく巣らしきものから飛び出てぴょんぴょん跳ね回っている。まてまてぇ～、デクナッツの後を追いかけ回し始めたリンク。

「許してッピ！！　もうしないッピ！！　見逃してくれたらいいこと教えるッピ」

「いいこと？　なになに～、教えてぇ」

妖精のパチンコを貰ったようにまた遊び道具を貰えると思ったリンクは、目を輝かしてデクナッツに聞き返した。まぁ、その期待を見事に裏切られるが……。

「この先にいる三つ子デクナッツがいるッピ。でも、決まった順に当てないとすぐ復活しちゃうッピ。
そこで秘密の順番を教えてあげるッピ。順番は２　３　１、『ニイさんイチバン』だッピ」

「そ、そなんだ……。……ねぇ、もっと他に面白いものないの？例えば……」

リンクは遊べる物がほしく、そんな情報いらないよ！！っと言わんばかりの顔でデクナッツを問いただしていた。先ほどの最上階にいたデクナッツのように物を要求しようとするが、

「しょうがないッピネ～。んじゃ、とっておきを教えるッピ」

「ここの一番下にゴーマ様がいるッピ。と～～っても強くて怖いッピ。でも、情報を教えて裏切ったボクは逃げるッピ。ゴーマ様……、ゴーマんなさい……。なんちって」

……、リンクの試練はまだまだ続く……。

3話【緊迫の連続】（後書き）

デクババ……植物タイプの魔物　その場は動けないが攻撃は意外ほど素早い　弱点は攻撃後の戻りが遅いこと

デクナッツ……魔物なのかは不明　一説では森の精とも…　攻撃は単純そのもの木の実を飛ばすだけ　意外と臆病者？

スタルウォール……髑髏模様を背負う蜘蛛の魔物　壁などにいるが領域を侵す者には容赦なく攻撃を仕掛けてくる

大スタルチュラ……スタルウォールの軽く2倍の大きさ　回転攻撃など体躯を活かした技や全体的に堅いので少々苦戦必至　唯一、腹が弱点

4話【悪夢再び……そして変な3兄弟】（前書き）

え～とまずは更新が大幅に遅れてしまい大変申し訳ないと思っております……。更新していなかったにも関わらず読んでくださった皆様には大変感謝しております。これからも『ゼルダの伝説　時のオカリナ』をよろしくお願いいたします。

感想・評価もお待ちしておりますので気軽に書いてください。作者の励みになりますし参考していきたいと思っている次第でございます。

では、長くなってしまいましたが本編をどうぞ。

4話【悪夢再び……そして変な3兄弟】

ヤァァッ。どこからか大きな叫び声が聞こえたかと思ったほんの数秒後、甲高い炸裂音が巨大な樹『デクの樹様』の中で鳴り響いていた……。

§

今、リンク達はデクの樹様の中枢部分の部屋まで来ていた。多少なりとも成長の兆しが見えたのか、デクの樹様の中に入った当初より慎重に歩を進めていた。キョロキョロと辺りを見回していると先ほど『死』を予見される程の恐怖を植え付けられた、そう、大スタルチュラが天井付近の蜘蛛の巣にぶら下がっていた。

うわわわぁッ。発見するや否や体を一瞬硬直し、音を立てぬようにゆっくりと部屋の入り口付近まで後退りしていった。

「ね、ねぇナビィ。上にまたあいつがいるよ…。うぅ…、どうしよぉ……」

幸いにも敵にはまだ気づかれてはいないが遠くから見てもわかるあの巨大な体躯に怖じ気づきながら弱々しく隣にいたナビィに知らせた。

リンクが指差した方向に目を向けてみるとナビィはあることに気が付き、

「リンク、パチンコで狙える？　怖かったらここからでもいいからあいつを打ち落とすのよ」

敵からの距離約８ｍ、『狙える？』その質問はリンクにとって無意味だ。なぜならリンクはすでに１０ｍ圏内であればほぼ命中させることができたからだ。

「うん、大丈夫。大丈夫だけど…、でも……」

リンクは言葉が詰まってしまう。　うぅ……、打ち落とせって言われてもさっき弾かれちゃったんだよぉ……。

さっきとは最上階での戦闘のことで絶対絶命の出来事であったため、一挙一動が鮮明に脳に焼き付いていた。当然ながら共にいたはずのナビィはというと、

「いいから！　早くしないと気づかれちゃうわよ」

迷っていたリンクに急かすように言う。そこまで強く言われてしまうと気弱なリンクに太刀打ちできるはずがなかった。

あぅぅ……、も、もう、どうなっても知らないんだからー！！

怖くて本人には言えず、あくまで心の中での叫びであるがしっかりと狙いを定めて弾を大スタルチュラ目掛けて放った。

ギィィィッ、断末魔のような不快な悲鳴が部屋全体に木霊する。その光景を見ていた２人はそれぞれ対照的な表情している。リンクは驚愕と言わんばかりの表情で何が起きたのかわからなかった。

ナビィはというと当然とばかりの表情で大スタルチュラを静かに

見つめていた。だが、

「！　まだよ、リンク！！　トドメを早く！！」

口をポカンと開けていたリンクに敵がダメージは負ったがまだ生きていることに気づき素早く追い討ちをかけるよう叫んだ。

……あ、うん！！　ようやく理解し始めたリンクは先程の攻撃で怯んでいる大スタルチュラに、

「ヤァァァッ」

力を込めて弾を解き放った。敵は致命傷、はたして……。

高い炸裂音と鈍い悲鳴音、ほぼ同時に聞こえてくる。悲鳴にならない悲鳴をあげた張本人は力尽きたのか地面に落下するや否やあたかも存在しなかったようにに消えていった。

「……あ、消えちゃったよ。もしかしてこれって死んじゃったの？」

消えゆくのを見ていたリンクは敵を倒したのかどうかナビィに確認する。そうね、やっと一段落ついたのか少し柔らかな口調で答えを聞いたリンクは、

「やったね、ナビィ。これで先に進めるね。……て、あれ？　そういえば何で今回は弾かれなかったんだろう？　ん～～……」

「それはね、大スタルチュラは腹が弱点なの。背中は堅い甲殻で

覆われているからそれで弾かれたのよ。
さっきは理解する余裕も無いほど怖がってたけど、弱点さえ分かればもう大丈夫でしょ？」

自分の疑問に的確に答えるナビィを見ながらなるほどと感心していた。リンクはコクリと頷きながらお礼の代わりに満面の笑みを応えた。

大スタルチュラがいなくなったことで部屋の中央まで来ていた2人、広いなーっとはただ辺りを見ていたリンクとは違い、警戒しながら見回していた。

ん～～、敵は……いないよね？　部屋全体見渡せるしここなら良さそうね。

「リンク、ここらへんでちょっと休憩しましょ」

ナビィは後ろをついてきていちリンクにそう呼びかけた。

このデクの樹様の中に入って魔物との戦い、そして幾多との緊迫の連続で顔に出してはいないがリンクは疲れていた。無理もない、これが初めての冒険である。

そんなリンクを見抜いていたナビィは休ませるために周りの安全を確認していたのだ。

「呪いの元凶に近づいてきてわよ。リンク、今まで以上に気を引き締めてね」

序盤より明らかに敵の数、そして行く手を阻む罠が多くなってき

ている。リンクも多少なりとも気付いてはいたが休憩で気が緩んだのか欠伸が出てしまう。タイミング悪……。

「ご、ごめん。あのね、なんというか……、えぇ～っと」

即座に弁明しようとあたふたしながら謝っているリンク。

だが、今のナビィは違った。いつもならしっかりして！と声を荒げて怒るのだが今は静かにリンクを見つめていた。

……きっとこれで終わりじゃない…。ん～ん、これ以上の危険だってたくさんあるはずよ。リンク……、あなたはとても危険で困難な運命を背負ってしまったの。この世界…、ハイラルを救う勇者として……。

「ナ、ナビィ？」

その呼びかけでハッと気がついたナビィ、どうやらリンクが語りかけていたのも聞こえないくらい考え込んでいたらしい。

どうしたの？、リンクがそう声を掛けても何でもないの一点張りだった。部屋全体におもむろな雰囲気が漂う。

少し時間が経ち2人とも無言でいたが、

「……、ねぇ、リンク、怖くない？」

「えぇ～っと、何に？」

「……これから続く冒険やいろんな出来事に…」

本当は言うべきではないことはわかっていた。そんなこと聞かなくてもわかる答えだし、気の弱いリンクにこんな質問してしまうと余計に不安にさせてしまう。

何を言ってるんだろう、私……。

ナビィ自身も不安と責任で少し参ってしまったのかもしれない。先程より、重い雰囲気なってしまうナビィ。後悔しながらも自分の発言を取り消そうとするが、

「…ごめん、わ『怖いよ』」

リンクの言葉にかき消されてしまう。え…、少し戸惑ったしまいながらも俯き加減だった顔を上げ、言葉を続けようとしていたリンクを見つめた。

「もちろん……怖いよ…。でもね、ナビィがそばにいて助けてくれるからここまで来れたと思うし、これからだって助けてくれる、そうだよね？

もし僕1人だけだったらすぐ逃げ出しちゃうと思うしね、ハハッ。2人でならきっとなんとかなるよね」

その幼い顔付きに似合う満面の笑顔で言う。『なんとかなる』、あまりにも曖昧な表現だがナビィにはその言葉の本当の意味は十分伝わっていた。

「……フフッ。じゃあ、逃げ出さないように私が見張ってなくっちゃね」

と、先程まで重たい雰囲気が一気に吹っ飛んでしまった。

休憩も終わりそろそろ行こうとするリンク、お尻のついたゴミをパンパンと叩きながら先程より軽やかに歩を進み始めた。

……リンク、ありがとう…。

少し遅れてナビィはリンクの後を追っていった。

§

ゴソッ…。リンクとナビィはこの部屋の謎を解き、燭台に火を灯し終えた頃どこからともなく何か動く音が聞こえた。だが、ほんの一瞬だったため2人は気付いてはいなかった。

「火は着いたのはいいけど、この後どうするんだろう？」

「ん～～」

2人は次なる謎を解き明そうと考えていた。ゴソゴソッ、先程とは違い今度は2人の耳にもしっかりと聞こえた。

「え…、今のって何の……」

リンクが言い終わる前に何かが天井から降ってきた。ドサッ、数は一つではない。少し遅れながらも恐らく3体といったところか。

「な、なに！？　何が起きたのっ？　何なのあれはぁ～！？」

リンク、完全にパニック状態。

「ちょ、ちょっと！！落ち着きなさいよ、リンク。わ、わたしだって初めて見たのよ！！　何なのあれはぁ～！？」

ナビィ、人のこと言えずパニック状態。

落下したきた物体はゆっくりと足を広げ、その大きな目を開き始めた。

異形、その言葉がピッタリな幼生ゴーマはリンク達を見つけるや否や大きな目を紅く染め、カエルのように飛び跳ねながら向かってきた。

「『逃げろぉ～』」

２人は同時に声をあげ一目散に逃げ出した。リンクはまだしも普段は冷静なナビィなのだが、自分も知らない敵＋不意をつかれたことでいつもの冷静な判断はできなかった。（リンクと同じ行動をとったのは偶然だが）

「のわぁ～～、うわわわぁ～」　休憩中、ナビィに言っていた言葉が霞んで見える…。情けない……、てか動揺し過ぎです…（ｂｙ作者）

わけの分からない言葉を発しながら逃げているリンク、そのすぐ横にいたナビィはようやく落ち着いてきたのか周りが見えるようになってきたのだが時すでに遅し、幼生ゴーマ達は既に攻撃態勢を終え、こちらの方向に向かって飛びかかってきていたのだ。ナビィは

この攻撃は避けなければ当たると即座に判断し、リンクに避けるよう伝えようとしたのだが、

「フギャッ」

顔から前のめりに大きく転けてしまった。だが、運が良かったのか転けたことで幼生ゴーマ達には予測できない回避になってしまった。

ペチャッ、何かに張りつく音が3つうつ伏せに倒れているリンクの耳に入った。

うぅぅ〜、痛い……、顔がジンジンするよぉ…。そういえば何の音だったんだ、今の？

少し紅く腫れている顔をさすり、立ち上がりながら音がした方向に目を向けてみた。

「リンク、大丈夫？　結構派手に転んでたし……て、大丈夫みたいね。
でも、ラッキーだったね。フフッ、ちょっと笑えちゃうよ、あれ」

ナビィが言うあれとは、音がした方向のことで音の原因はゴーマ達が蜘蛛の巣に絡まっていたのだ。振り解こうとしているが余計に絡まり、次第に身動きさえできなくっている。

…なんてかわいそうな……

§

「やっと下まで来たよ。頑張ったなぁ、僕」

と、それまで降りてきていたツタの高さを見上げながら自分を労うように言った。

「そうね。でも、そのまま落ちて来れば1番早かったのよ？」

確かに落下地点は深い水溜まりがあり、ナビィの言うとおり1番てっとり早く降りられる。だが、高さが数十mもありかなりの勇気が必要だ。

……、僕にできるはずないじゃん……。

気弱なリンクにそこまでの勇気はないらしく、無理だからという顔をしながらナビィに無言ではあるが反論していた。

「まぁ、リンクには無理そうね、……あ、ねぇ見て。あそこに大きな扉があるわよ。

でも、注意してね。上の階のデクナッツが言っていたのってあいつらかもよ」

リンクはナビィに言われた方向に目を向けて見ると扉を中心に左右と真ん中、3匹のデクナッツらしき枯れた花がいた。まだリンク達には気付いてはいないがあれがデクナッツ3兄弟だ。

「リンク、あのデクナッツが言っていたこと覚えてる？」

「えぇ～とゴーマ様ゴーマんなさい？」

「そっちじゃないわよ！！！」

ナビィ……、声が大きいよ……。リンクの言うとおり案の定3兄弟に見つかってしまったのだ。

「あぁー、もう！！　手短に言うからよく聞いて。倒す順番は2、3、1、つまり真ん中、左で最後に右よ」

と、手早く伝えそれを聞いたリンクは返事をする暇もなく頭だけコクリと頷いた。

一方デクナッツ達はというとおなじみの喋り方で、

「誰だッピ！！」

「ここは通れないッピ！！」

「すぐに立ち去るッピ！！」

と、既に臨戦態勢と言ったところかものすごい勢いでリンク達を威嚇している。

……あ、順番通りに言ってる。ハハッ、分かりやすいなぁ。

3匹とはいえ、既にデクナッツ戦は2度経験している。気持ちに余裕が出て来たのか慌てることも無く戦闘態勢に入る。だが、少し油断も生まれていたのかもしれない……。

ナビィの指示通りまず最初は真ん中のデクナッツを狙う。

「オ、オイラからッピか！！　来るなら来るッピ！！」

デクナッツ長兄が叫ぶ。そして、得意の実を吐き出してリンクを退けようとする。

チャンスと言わんばかりに素早く盾をデクナッツ長兄に標準を合わせる。跳ね返っていった実は見事に頭部に当たり、デクナッツ長兄は直立したかと思うとバタンと後ろに倒れた。恐らく気絶したのだろう。

「いいわよぉ、その調子で頑張ってリンク。次は左よ」

リンクを讃えながらも次の目標へと促すナビィ。

楽勝楽勝、つ～ぎは左っと……。

にぃ～ちゃ～んとデクナッツ長兄の安否を心配して叫んでいるデクナッツ次兄に目標を定める。

楽勝モードのリンク。次男の方を向き、敵が近づいたことで慌てて吐き出した実を盾で跳ね返そうとしたのだが、

「リンク！！」

ナビィもデクナッツ次兄の方見ていたのだが、嫌な予感が過ぎったのだ。

…よ、よくも兄ちゃんを……。これでも食らうッピ！！

末弟のデクナッツは長兄がやられたことで危機感を覚えていた。

そして意外に冷静な末弟はリンク達が次兄の方に気を取られているのを見逃さなかった。

がふっ……。ナビィが叫んだ直後、リンクの脇腹に稲妻に似た衝撃が走った。そう、デクナッツ末弟が放った実が直撃してしまったのだ。幸い次兄が放った実は跳ね返す角度は変わってしまったが盾で防ぐことは出来たのだが、リンクは痛みでその場に膝をついてしまった。

うぅ、い、痛い……。今のは……、そうか後ろに居たんだよ。僕のバカ……、そんな簡単なこと忘れるなんて……。

ゴホッと咳き込み、当たった箇所を押さえながら末弟にやられたことに気が付いた。

「！！、次の攻撃が来たよ！！　早く避けてぇー！！」

と、更なる攻撃がきたことをナビィは伝えた。

よ、避けなくちゃ…、脇腹に走る痛みを堪えながらリンクは出来るだけデクナッツ達と距離を取った。

ある程度離れた所でデクナッツ達も攻撃を止めた。あれだけ離れていては攻撃しても無意味とわかっているからだ……と、末弟。次兄は弟に言われてやっと攻撃を止めた。

「……大丈夫？　ごめんね……、私がもっと早く気付いていれば……」

「ナビィが悪いわけじゃないよ。僕が油断していたんだからさ……。イテテッ、でも、どうしよう……。一緒に攻撃されちゃうと…

…」

ナビィが気遣いながら謝っていたがリンクは全然気にしてなどいなかった。むしろ自分の油断から招いたことだからと自覚している。

どうにかして1対1に持ち込まないとつらいよね。リンクもこの状態だし…、何かないかしら……。

ナビィは色々と模索していたが、デクナッツの吐き出し実をヒントにあることに気づいた。

「リンク、ここへ来る前にお店で買ったデクの実はまだある？」

「いっしゃ～い」

デクの樹様のところへ行く前にコキリの剣とデクの盾を装備してくるようミドに言われたリンク達。というより、装備して来なければ通してもらえなかったのだ。

リンクはミドに色々悪口を言われ、少々半泣きの状態だが泣いている暇などない。それで1番安易な考え、まずはお店で売っていないかと思い立ち寄ったのだ。ひょこっと顔を出した店員に、

「あの～盾と剣って置いてる？」

と、よそよそしく聞いてみたのだ。残念ながらこの店では剣はなかったがデクの盾は置いてあったのだ。

「あ、ちょっと待ってリンク。え～っとね……」

自分の小遣いが半分持っていかれ、ちょっぴり悲しんでいるリンクにナビィは呼び止めていた。なにやら何かを探しているのだろう、見つけると店員を呼び買うことを伝えた。

……、何これ？とナビィが買うことになった少し大きな実、デクの実を初めてみたリンクは少々戸惑っていた。買った張本人はというといいからその内わかるからと言葉を濁し、詳しくは教えてはくれなかった。

「んじゃ、お勘定お願いしま～す。全部でいくらになりますか？」

「はいぃ～、毎度。全部で９０ルピーだよ～」

「えぇぇ！！！」

財布の残金……２ルピー……。

「……あぁ、あのお店でナビィが買った物でしょ？　ちょっと待ってね」

ナビィが言っているデクの実を腰に付けている小型のバックからガサゴソと探した。中に入っていた５つの内１つを取り出し、これ

のこと？とナビィに差し出して見せた。

「い～い？　今から言うことをよく聞いてね。まずはこの実を右のデクナッツの目の前に投げつけるのよ」

「え？　でも、それじゃあ順番違くなっちゃうよ？」確かにそうだ。先程ナビィ自身も言っていた通り、先に次兄の方を倒さなくてはならないのだが、

「いいのよ。このデクの実は閃光弾の代わり、つまり相手を怯ませるよ。ここまで言えばだいたいわかるよね？」

と、言われて少々時間はかかったが、なるほどと声をあげながらナビィの作戦を理解した。

なら話は早いという素振りのナビィと共に、いざデクナッツ3兄弟戦、第2Ｒｏｕｎｄへ……。

4話【悪夢再び……そして変な3兄弟】（後書き）

幼生ゴーマ……ゴーマの子供。小さき体躯に似合わぬ硬き甲殻、異形の姿。紅く染まった瞳で敵を恐怖へ誘う。

5話【……元凶……】（前書き）

どうも、毎度おなじみの作者です。またもや更新するのにこんなに遅くなるとは……本当にすみません…。

今回の話はオリジナルも少し入れていますが会話は少なめです。戦闘の方を重視しておりますので駄文なってしまっていたら申し訳ないです…。

更新を早めに日々精進していきますので今後ともよろしくお願いします。前書きが反省文になってきているような……（笑）

遅れてしまいましたが本文をどうぞ。

5話【……元凶……】

「ねぇ…、どうして…。ねぇどうしてなの！？」

「ごめん、ごめんなリンク。……もう『時』が動き始めてるんだ…」

「僕にはわからないよ……。でも！！　なんでアシュドが……」

「……わかってくれ、行かなきゃいけないんだ……」

そして1人の少年は、この深き森から旅立って行った……。

「アシュドォォーーーッ！！」

§

「……ンク？　ねぇ、リンクってば」

……、へ？　ナビィの幾度の呼びかけにやっとのことで気付いたリンク、それを見たナビィは少し溜め息をつきながらも、

「いったいどうしちゃったの？　やっぱりさっきの場所まだ痛む？」

単なるボーっとしていただけなのかしら？　と思いつつもナビィは先程受けた傷の治り具合が気にかけるように言った。

先程のデクナッツ3兄弟戦を終え、少し離れた場所にいたリンク達。ナビィの見事な作戦で退けることができ、そのやられた3兄弟はというと、

「兄チャン……、いつまで寝てるッピか！！　早く起きるッピ！！」

真っ先にやられたはずなのに未だ気絶中である長兄を残る弟達、主に末弟なのだがこれでもかと言わんばかりの勢いで起こしていた。

「え～っと……、大丈夫だよ。なんか戦いが終わったら気が抜けちゃったのかも、ハハハハッ」

頭の後ろに手をまわして後方に仰け反りながら大笑いをしていた。心配して損したわ……、そんなリンクを見て拍子抜けしたのかナビィは少し安堵の溜め息をついた。だが、果たしてリンクの本心は本当にそうだったのであろうか……。

§

「そんなに言うならもう止めないッピ。んじゃ、僕達は行くッピよ。死なないことを祈るッピ」

デクナッツ末弟がそう言い終えると3兄弟はどこかへと立ち去っ

ていった。

デクナッツ3兄弟がいなくなり、当然ながらそこにリンクとナビィしかいない。そのデクナッツ達がいなくなったことで先程から感じ取れていた禍々しい闘気がより一層大きく、より強くリンク達は伝わってくる。

「……今さら帰るとか……、冗談はやめてよ…リンク……」

ギクッ、と聞こえてきそうな程大きなリアクションをとるリンクは、

「い、言わないよぉ〜。何言ってるんだナビィは、ハハッ……」

と、図星を言われ誰が見ても動揺していることは明らかだった。

やっぱりね…という顔をしているナビィは、即座に気持ちを切り替えて、

「リンクもわかってると思うけどこの先にいる敵は多分、今までとはレベルが違うのよ。だから、1秒たりとも気を抜かないで。わかった？」

先程のデクナッツ3兄弟戦で見せた油断、次の敵は確実に強敵、無論死に繋がることはナビィにはわかっていた。まるで自分にも言い聞かせるようにリンクに言う。

うん…、とだけ返事を終えた後は一言も声を発しなかった。当然であろう、このビリビリと全身が針で刺されたような闘気を見せつけられたら嫌でも緊張してしまう。

うぅ……足の震えが止まらないよ…。で、でもナビィだっているしきっと……僕…やれる…、よね？

恐怖と不安からくる震えを抑えつけようとリンクも自分に言い聞かせるように僅かな気合いを入れたのだった。

そしてナビィの呼び声を合図にリンクは最後の部屋へと歩を進めていった。

§

な、なんなのよ、これは……。

部屋に入るとそこは地上からの光が差し込まぬ薄暗い闇の世界が広がり、そしてこの部屋だけが異様な冷気が漂っているようだった。ナビィとリンク、今の状況を同時に思う。

『普通じゃない…』と……。

重くドス黒い魔の雰囲気が2人を誘い、深き泥沼ように飲み込んでいった。部屋は視界がかなり悪いこともあり、2人は細心の注意を払いながら辺りを見回していた。

……いったいどのくらい経ったのであろう。実際はさほど時間は過ぎていなかったが張り詰めていたこともあり、2人にはまるで1分が1時間のように感じ取れていた。

流石に張り詰めていた緊張も緩み始めた頃、２人の耳に以前にも覚えのある音が聞こえてくる。

ガサッ…ガサッ…。そうあれは幼生ゴーマと同じ天井を這ってくる音だ。だが、周りが見えにくい分、部屋全体から聞こえてくるようでナビィもリンクもその音の正体に困惑していたが、

「！！　リンク、真上を見て！！」

ナビィの言葉で素早く真上を見るとこの暗闇では異様とも言える鋭い眼光がリンクを射抜いていた。

ゴクッ……か、体が…動…かない！！　うぅ……見られているだけで息が苦しいよ。……あっ！！

その圧倒的な迫力から威圧感とでも言うのだろうか、その邪悪なまでの瞳に凝視されていることで金縛り状態に近いリンクは自身に迫りくる危険を察知した。

グコッと堅い関節らしきものが動く音がしたかと思った瞬間、

「リンク！！　逃げてぇ！！」

今、その全体像が明らかになる。あまりにも巨大なまるで岩の如き体躯が天井から落下してきたのだ。

あんなのに下敷きになったら……、考えなくても答えは簡単にわかったナビィは身震いしてしまう。だが、リンクを見たが一向に動こうとする気配がない。

「何をしているよ！！　あんなの喰らったらお終いなのよ、リン

クッ！！！」

わかってる、わかってるよ！！　でも、どうして！？　頼むから動いてよぉー！！！

ナビィに言われるまでもなく頭では避けなければと必死なのに体がまるでキツく縛られたように硬直し指一本でさえ動かすことができないでいた。そんな時、

『……リンク…』

誰かがリンクの名を呼ぶ声がした。その声は低く、とても静かな声質で先程から声を荒げているナビィではない。だが、その謎の声が耳にした瞬間に今までの硬直が嘘のように解け、間一髪避けることができた。

……えっ、今のはまさか……。

なんとか危機を脱したリンクだか先程の声には聞き覚えがあった。そして思い出したのか、自分の耳を疑ってしまう。なぜなら声の正体はここにいるはずのない人物であった。

そんな…アシュド……だよね、今の？　リンクは声を発した人物を探したかったがそうも言ってはいられない。

ギシャァァァ…。前足を持ち上げ、これでもかと言わんばかりに威嚇の咆哮をあげていた。そして幼生ゴーマと同じく眼がどんどん紅く染まっていく。まるで自分の攻撃を避けたリンク達に腹をたてているのか怒りに満ちてゆく、そういう雰囲気を醸し出していった。

これが……、デクの樹様の呪いの元凶なの……。

それまでの敵とは比べものにならないほどこの暗闇でもわかる巨大な、そして恐ろしいまでの威圧感ある姿、ゴーマにナビィは圧倒されていた。

天井から落下時に見ていたのと間近で見るのではまるで違う。リンクも恐怖という感情がフツフツと湧いてくる、そして、

「か、勝てっこない……」

絶望という感情に支配されてゆく。思わず座り込みそうなくらいリンクの膝は揺れていた。

しかし、まるでそんなことなどお構いなしにゴーマは大爪をリンク達目掛けに振り下ろそうとしている。体が巨大なゆえに動きは緩慢であるのだが、…よ、避けなきゃ……と頭では理解しているが負の感情に支配されてしまったリンクの体では動作がやや遅れてしまう。

さ、避けられない！！　そう思ったリンクは咄嗟に手にしていたデクの盾で防ごうとしたが、

「ガハッ！！」

ゴーマの攻撃を盾で防いだ分、直撃は免れたがあまりの衝撃で吹き飛ばされ、この部屋の大きな柱に激突した。

ナビィは後方へ吹き飛ばされたリンクの所に急いで飛んでいった

が、たどり着く前にまるで木の葉のように力無く霧状の煙が漂っている地面へとリンクは落ちていった。

落ちた場所へ行くと激しい呼吸音と苦痛で歪んだ表情のリンクが片膝に手を起き上がろうとしていた。それは如何にどれほどのダメージだったのか物語っていた。

「大丈夫！？」

「うぅ…、なんとか……」

声をやっとの思いで出したくらいの小さな声でリンクは返事を返した。不幸中の幸いとでも言うのだろうか、吹き飛ばされたおかげでかなり距離が空いていた。

「ひとまず距離を取ってダメージ回復に専念して」

リンクは頷き、まだダメージが濃い体をのそりと動かした。

ハァ…ハァ…とゆっくり歩いているだけなのだが見るからにつらそうなリンク、本来ならば少し休ませるべきだとナビィはわかってはいるがそれよりこの局面を打開する作戦を講じる方が先決であった。

あいつも動き自体は遅いわね。リンクはこの調子じゃ……、このまま遠距離で……。

こちらに向かっているゴーマの動き、そして今のリンクの状態から考慮して遠距離、つまりパチンコを用いる戦法をとることだった。……いや、その戦法しか選択肢がなかった。

それまでゆっくりではあるがリンク達を追っていたゴーマはピタリと動きを止め、様子を見るようにその大きな瞳でリンク達を凝視し始めた。

え？　と作戦を伝えようとしていたナビィはあまりにも突然の出来事に思わず声をあげてしまった。その声に気付いたリンクは一度ナビィを見て、ナビィも見ていたゴーマの方へ振り向いた。

再び紅みを帯びてきてた眼には怒気に満ちており、リンクとは逆の方向を向いたかと思った次の瞬間、雄叫びをあげながら柱へとよじ登っていった。

なんなの？　何が始まろうとしているの…？…？　ナビィとリンクはゴーマの行動を一部始終見逃さないように足を止め見ていた。

ゴーマは天井に張り付いて尾らしき物を垂らすと、その次なる出来事でリンク達を驚愕させた。

あ、あれって……、もしかして…。

３つの見覚えある卵を産み出したのだ。程なくして卵はガタガタ動き出しゴーマに似た生物が生まれた。それはリンク達がここへ来る前、あの休憩を終え謎解きをしていた時に不意をつかれた幼生ゴーマ達だった。

「あれは……、そうか、あいつの子供だったのね。道理で見たことがないはずよ。……リンク、まずはパチンコで応戦してみて」

ゴーマとその幼生達とはかなりの距離が空いており、しかも今回は様子を見ながら自分の得意分野で戦うことができる。さらに多少

だが受けたダメージも抜けてきていた。

3匹それぞれに意思でもあるのかリンク達を見つけるとギィ、ギィとまるで会話しているようにピョンピョンと跳ね回っている。そしてその会話が終わると猛然とリンク達に向かってきたのだ。

パーン…、短い間隔で3つの炸裂音が部屋の中で鳴り響いた。

あ……し、しまった……。3匹の小さな体は後方へ弾き飛ばされ、そして2匹は消えていった。

しかし、残る1匹は致命傷は受けたもののまだ死んでいなかった。

やっぱりまだ痛むのね…。……リンク…、頑張って！！

3発目の発射時に背中の痛みにより僅かながら手元に狂いが生じたのか……、幼生ゴーマは立ち上がるや否や一目散に逃げ出し始めた。

グオォォ…、自ら産み出し幼生がやられたことに怒りを覚えたのかまた自らから手を下そうと怒声を発しながら落下してきた。無情にも自ら産み落とした我が子を下敷きにして……、それほどゴーマの怒りは深い……。

眼を真っ赤にしながらリンク達に向かってくるがまだ距離は十分ある。迫力に押されそうになるがゴーマ目掛けてリンクは狙い定めた。

しかし、その隆々とした岩石の如く硬い甲殻の前ではいくら堅い木の実を使用していても無力に等しかった。命中はしたが弾は粉々に粉砕しゴーマの勢いを止めることはできなかった。

ならば狙いは……、

「リンク、眼よ！」

ナビィは唯一とも言ってもいい甲殻に覆われていない眼を狙うようリンクに促す。リンクはナビィの言葉より先に狙い定めていた。

グギャァァ！！！、見事に弾はゴーマの瞳に当たった。そして低い地鳴りのような叫び声を鳴り響きかせながら軽いめまいを起こしたゴーマ、大きな轟音と共に柱に体を激突させ、全身を痙攣させながら気絶している。

本来なら貫通力もある堅い木の実を使用したパチンコの弾なのだが、比較的柔らかいであろう眼球に命中したはずが流石と云うべきかゴーマはこの程度で済んでいる。

あ、あれ……？　気絶しただけなの？　でも、もしかして今がチャンスだよね…。

自分の意思とは反し、なぜか自然とゴーマへと歩を進めるリンク。後ろから、

「待ってリンク！！　ひとまず様子を……」

ナビィが静止させようと声をかけたのだがリンクの耳には届いていなかった。届いていたのは高ぶる自分の心臓の鼓動と聞き覚えのあるあの声だけだった。

『リンク…』

え……今、僕は何しているの？　なんで……、なんで体が勝手に動いているの？　うぅ…なんだかこれ…、恐いよ……。

またもやリンクの意思に反し、今までナビィはもちろんのことリンク自身も見たこともない程の剣技の連続だった。それはゴーマが声を出すことも出来ない程だった。

あ、あれが…リンク……な…の……？　まるであれじゃ……。

グガァァァ……、リンクの息つくこともできない強烈な斬撃の前に何もできないでいたゴーマだったが一瞬立ち上がったと思いきや最後の絶命する叫びをあげながら倒れていった。

「リンク！！　リン……」

先程パチンコで撃ち落とした場所で呆然とリンクの戦闘を見ていたナビィは力尽き、そして消えゆくゴーマを見ていたリンクのそばまで飛んで行った。

しかし、そのリンクの表情を見たナビィは言葉を失った…。

普段のリンクから考えられない程の表情、氷のように冷たく深海のようにどこか哀しげな表情だった……。

『…リンク……俺は…』

5話【……元凶……】（後書き）

ゴーマ……巨大甲殻獣　正に魔物の権化とも云うべき姿　弱点は子供と同じ眼である

6話【限られた命を……】（前書き）

え～と短文ですが、本文をどうぞ。

6話【限られた命を……】

「おぉ……やってくれたか…、ありがとう…リンク……」

呪いの元凶であるゴーマを倒したリンク達。入口は閉ざされ、出口はどこにも見当たらなかったがゴーマが消滅したと同時に眩い光の柱によって外へと脱出したのだ。

そして着いた先はデクの樹様の目の前だったのだ。

「お前の勇気……、確かにみせてもらった…。そしてお前は…、ワシの願いを託すに相応しい少年であった……」

……、いつもリンクに戻ってる…。さっきのは一体……、あれじゃ…まるで別人よ…。

ナビィは外に出てからもゴーマを激しい斬撃で倒したリンクのことを考えていた。そして冷たく、悲しき表情が頭に焼き付いて離れなかった。デクの樹様に褒められたからって明らかに照れている今のリンクからは想像もできない。

「……ビィ、ナビィよ…。聞いておるのか……？」

「……ハッ、は、はい！！　すみませんでした、デクの樹様…」

深く考えるあまり、森の守り神であるデクの樹様の大切な話を聞いていなかったナビィ。隣にいたリンクが心配そうに顔を覗かれて

しまう始末だ。

「…ふむ……、では、改めてリンクとナビィ……、お前達にワシの願いを伝えたい…。聞いてくれるかな…？」

その言葉を聞いたナビィは神妙な赴きで頷いた。一方、リンクは褒められた嬉しさそのままにうん、とお気楽に答えた。

「では…心して聞いてくれ……。ワシに呪いをかけた者は黒き砂漠の民じゃ…」

「邪悪な魔力を操り、このハイラルのどこかにあると言われる聖地を探し求めておった……。

なぜなら…聖地には、神の力を秘めた伝説の聖三角、トライフォースがあるからじゃ……」

「あの黒き砂漠の民をトライフォースに触れさせてはならぬ！！悪しき心を持つ、あの者を聖地へ行かせてはならぬ！！」

今までの穏やかな口調とは一変し、自らの枝を揺らしながら確固たる否の意思を強く伝えるデクの樹様、そして再び静寂に語り始めた。

「黒き砂漠の民は、邪悪な呪いでワシの力を奪い取っていったのじゃ…。……やがて、呪いはワシの命をも蝕んでいった…」

「そんな……、まさか……」

ナビィは何かに感づいたのかうなだれるように自身の光が弱り、揺らいでいた。

「ナビィよ…。…そしてリンク…、お前達は見事に呪いを解いてくれたのだが、どうやらワシの命の時間は元には戻らぬようじゃ……」

え…、それって……。ようやく話の内容を理解し始めたリンクは確認しようとナビィを見るが力無く飛んでおり、まるで泣いているようだった。そして、次のデクの樹様の言葉でようやくその真意を理解した。

「ワシはまもなく死を迎えるじゃろう……。だが…悲しむことは…ない……。何故なら今こうして…、お前達に伝えられたこと……それがハイラルに残された最後の希望だからじゃ…」

一つ一つの言葉にとても重みがあり、リンクもナビィももう言葉を発していなかった。……いや、発しようとは思わなかった。

「リンクよ…。ナビィと共にハイラルの城へ行くが良い…。その城には、神に選ばれし姫がおいでになるはずじゃ……」

「そしてこの石を持って行け…。あの男がワシに呪いをかけてまで欲した……、このコキリのヒスイを……」

そう言い終えると、デクの樹様は最後の力を振り絞って、リンクにコキリのヒスイを託した。

「こ、これは……森の精霊石！！　デクの樹様！　命の源であった精霊石を渡されてはもう命が……」

「良いのじゃ…ナビィよ…。リンク…、ワシに見せてくれたその勇気…信じておる。
妖精ナビィよ……。リンクを助け、ワシの志を継いでくれ…」

「『……はい…』」

2人は心に刻みつけるように深く、そしてしっかりと答えた。

「…たの…ん…だ……ぞ……」

と、言い終えるとデクの樹様の葉は枯れてゆき、幹は生気漂わぬ色へと変色していった。

うぅ……、グスン…。枯れてゆくデクの樹様を見ながらナビィは泣いていた…。デクの樹様の体内に入る前から薄々感づいていた……、しかしいざ目の前にすると溢れる感情を抑えることはできなかった…。そして……、

ワァァァ〜〜ン……、デクの樹様ぁ〜……。

§

あれから少し時間が経って少し離れた場所でナビィを見守っていたリンクは落ち着いてきたを見計らって声をかけた。

「大丈夫……ナビィ？」

「グスン……う、うん。ごめんね、時間かけちゃって」

いつもの状態に戻りつつあったナビィは、気にしなくっていいよと笑顔で答えてくれたリンクに感謝していた。

ありがとう……リンク…。そうよね…、あの時のリンクには確かにびっくりしたけどリンクはリンクよ…。もっとリンクのこと知ってもっとリンクのこと信じてみよう…。そしてまたあの時ようになったら私が助けるよ……、リンクがリンクでいられるように…。

「さぁ行きましょ、リンク。お姫様が待つハイラル城へ！！」

悲しみを払拭して元気を取り戻したナビィは次なる目的地ハイラル城へと急ぐため、亡きデクの樹様をリンクと共に後にした。

…さようなら、デクの樹様……。

7話【旅立ちの時…～親愛なる友へ～】

この深き森にとって守り神の死はあまりにも大きかった…。木々達はまるで会話をしているように静かに揺らぎ、その木々達に囲まれし森で生ける者達は激しくざわついている。現にコキリ族の中にも気づいていた者はいたが、その死の真相全てを知っていた者はただ1人しかいなかったが……。

「え～っと、これは置いてって～、こっちは持っていこうっと」

と、あれこれ手を伸ばしてはいらない物は投げ捨て、必要な物はバックに押し込んでいた。

リンク達は一旦自宅へ戻って来ており、デク樹様が言う神に選ばし姫に会うためにその準備や支度を整えていたところだ。

「……あ、そうだ。おやつの木の実忘れてた～。え～っとたしかここらへんに……、あれれ…木の実がない！？」

酷く慌てた様子でガサゴソと棚やその周辺を探し始める。棚に置いてあった物や小さなツボをポンポンと放り投げて探すのはいいが後で掃除が大変だろうに…。

……いや、掃除なんかする必要などないのかもしれない…。リンクはもうここへは……。

「はぁ～…しょうがない……。取りに行ってこようっと。ナビィ、ちょっと出掛けてくるね～」

と、集めに行くのが面倒なのか少々ため息混じりに言う。窓の近くでフヨフヨと漂うようにコキリ族の里を見ていたナビィは、…あ、うん…とまるで上の空…、リンクの方へは振り向かずそのまま応えていた。

……やっぱりあの事が…。……、そっとしておこう…。

ナビィの事を気にかけてはいるが今の自分には元気づけてあげる事もできない。己の力量不足を痛感しながらもいったいどの位のおやつを持っていくのかわからない程の大きめのバックを手にする。

んじゃ、行ってくるね～と先程から変わらない態度のナビィに声をかけて外へと走って行った。

§

「……リンク…、デクの樹様を死なせたのは、お前のせいだかんなー！！！」

ビクッ…と一瞬何かに怯えた様子で拾い集めていた木の実を落とすリンク。頭にあの言葉がよぎる度に体が反射的に硬直してしまう。

ボ、ボクじゃないのに……。

デクの樹様の異変にいち早く気づいたミドは細道から出てくるなりリンクに問いただし、そしてあの言葉を浴びせたのだ。無理もない…、あの状況でリンクを疑うのは当然の事である。

違うよ！！　僕じゃ……、いくら反論しようにもミドは聞く耳持たず、どうしようもなくなったリンクはただひたすら走って逃げるしかなかった。そう…泣きながら……。

……あ、おかえ……え、どうしたのリンク…。ちょっと待って、待ってよリンクゥ――！！

リンクの帰りを待っていたサリアの静止を振り切って自宅へ駆け込んでってしまう。実際、サリアの存在自体に気づかない程リンクは必死だった。

…どうしてなの……？　僕、悪いことなんかしてないのに……、ん～ん…、むしろ良いことしたんだよ…。

と、何度も自分に否がないことを思い返してみたが、一向にはっきりとした答えは出てこなかった。やがて落としていた木の実も拾い集め、大事なおやつになる木の実拾いを再開する。

しかし、簡単には払拭する事ができない。だが、リンクの意志に反し、まるで直に聞こえてくるかのように……、

…ねぇねぇ、聞いたぁ？　なんでもデクの樹様死んじゃったんだってぇ～……。

…う、嘘！！　だって森の守り神であるあのお方が……。

噂によるとリンクが死なせたって……　。

コキリ族ではこの話で持ちきりだった。ある者は罵声を浴びせ、一方ではまるで忌み嫌うがの如くリンクを見るなり立ち去ってゆく。

うぅ……もうやだよ……とまた泣き出してしまい、何度も…何度も…涙を拭き取ろうとしても止まる事はなかった……。

ボクじゃないのに……。

いったいどの位経ったのだろう。木に背中を預けて膝を抱えながら泣いていると、

「…リンク…」

この場所には誰もいなかったはずがリンクではない他の者の声が聞こえたのだ。だが、その声はリンク自身よく知っている人物で、顔を上げてみるとやはりそこにはサリアが立っていた。

……あ、あ！！　自分が泣いていたことに気づくとひどく慌ててしまい、言葉に詰まってしまう。、

「サ、サリア！！　ど、どうしてここに？」

「フフッ…、だってミドにいじめられるといつもこの木で泣いてたじゃない。それに……、ここはリンクとサリアのお気に入りの場所でしょ」

今更何を言ってるの？　という不思議な顔で見ていたがサリアが笑うとリンク自然に笑みがこぼれた。先程まで泣いていたのも忘れて……。

「…ねぇ、リンク。いつもの場所行かない？」

そう言うと木にもたれかかっていたリンクに手を差し伸べる。うん…、と手を掴んで立ち上がり、サリアの言ういつもの場所へと向かった。

んしょっと…、わぁ～……いつ来てもキレイだなぁ…。

紅く色づく夕日が深き森全体を覆い尽くす霧を朱色に染め上げている。それは幻想的…そのものだった。…あ、と目の前に広がる風景を見ていたが声をあげてあることに気づいたリンクは、

「はい、この手に捕まって」

と、まだ登りきれていなったサリアに手を差し伸べる。早くサリアにもこの景色を見せてあげたかったのだ。

「ありがとうリンク。……ん、わぁすごいね…」

ゆうに何十mもある大木の中腹まで登り終えたリンクとサリアは一際太い枝に腰掛けた。

ここに来るの…、出来なくなっちゃうんだよね……。……、サリアとこうして遊ぶのも…。

名残惜しそうに景色を……、そして切なさそうにサリアの顔を見

る。日が暮れて森が闇で満ちる時には、リンクはもうこの森を旅立つ事を決めていた。無論、旅立つ事は誰も知らない……いや…誰も知ろうともしない…。今、リンクを相手する者などいなかったからだ、唯一人を除いて……。

「ん？　どうしたのリンク…。サリアの顔に何か付いてる？」

自分の顔をずっと見ていたリンクに疑問を覚えた。

「……あ、ご、ごめん。何でもないんだけどさ、ただなんとなく…ね……」

「フフフッ、変なリンク」

ふいに我に返ったのか、慌てて弁明しているのを見てサリアは口を抑えながら笑っていた。

……サリア…。

空にいつの間にか朱色から藍色に変わり、我先にと小さき者達が煌めき始めようとしていた……。

§

ふぁぁ～ぁ……、これでもかと言わんばかりにデカいあくびをしながら歩いているリンク。いつもならもう寝ている時間で、先程からあくびが止まらない。

う〜〜ん…、帰って来てからちょっと寝たのになぁ。やっぱり１０時間くらい寝ないと眠いよ〜……。

と、あくびをもう一発…。

そんなリンクを見ていたナビィは、子供だからと解釈しながらも勇者として少し自覚してほしいともう一方ではそう感じていた。

突然、ヒャァ…と先程まで緊張の糸が緩みっぱなしのリンクがいなきり小さな悲鳴をあげる。雲で月の光が遮られ、僅かな時間だが闇が森を支配したのだ。

ハァ〜と溜め息をつきながら一声かけようとリンクに近づくが、

……リンク…。

どこからリンクの名を呼ぶ声がする。そして雲で遮られていた月の光が声の主を照らし出した。

「サ、サリア！？」

そう……それは夕方まで一緒にいたサリアだった。

「やっぱり行っちゃうのね……」

え……、自分がコキリの森から出て行く事…そしてあの時と同じ…とても寂しい表情をしながら橋の上で佇んでいるのを見たリンクは驚いた。

「あ、あのね、デクの樹様の事はホン……」

デクの樹様の死の真相を説明しようとするが言葉を遮るようにサリアは指を優しく…そして静かにリンクの口に触れる…。

「いいの…。サリアね、わかってた……。デクの樹様の亡くなる前から、リンク…いつかは森を出て行っちゃうって事……。

……アシュドと同じように…ね……」

言葉を言い終えると俯いてしまう。その声は徐々に弱々しくなっていった…。

「だってリンクも…アシュドも…、サリア達とどこかちがうもん…」

リンクは少なからずショックを受ける。つい最近までなぜ妖精がいなかった事に…幼少期までなぜ誰にも受け入れてもらえなかった事に…、そして唯一受け入れてくれて皆と普通の会話が出来るまで手助けしてくれたサリアに否定されてしまった事に……。

そしてアシュドまでも……。

だが、サリアの次なる言葉が悲しみの淵から救い出す事になる。

「でも…でもね…。そんな事どうでいいの…リンクが何であれ、リンクはリンクだから……。

アタシたち…、ず～っと友達！！　そうでしょ？」

カクカクと顎を動かし激しく肯定。

「…ねぇ、リンク。サリアの大事なオカリナ…あげる…」

それはいつもサリアが肌身離さず持ち歩いて妖精のオカリナ…。ミドにいじめられ、落ち込んでいる時に隣で励ますように吹いてくれたあの思い出のオカリナ…。

「これって…、サリアの大切な……」

「いいの…。リンクに持っててほしいから……。時々オカリナを吹いて思い出してほしいの…。そして、サリアの事忘れないで……また会えるって信じてるから……」

「も、もちろんだよ。…会いに来るよ……約束する…」

「うん……、それとね……ん～ん、何でもない…」

ん…、何だったんだろう？　……まぁ、いいや…。

何かを話そうとしていたがさほど気にする様子もなくリンクは聞き流していた。

だが、リンクはこの時は知らなかった。サリアが話そうとしていたこと…、それはこれからの冒険で重要な…、そしてリンクの人生を左右することになっていたということに…。

…リンク、アシュドを……アシュドを助けてあげて……。

8話【事件勃発！？】

ハイラル城がある城下町はいつもと変わらず賑やかであった。この街には道具や武器などを売買している雑貨屋、その地方ならではの特産品を並べている露天商、はたまた仮面屋や的当てなど娯楽性のある店など多種多様に至る。

そして人々が店を更に活気をづけている。流石は城下町というだけのことはある。いや…、なにより王政の良さが伺えてくる。

…むぅ、珍しい格好をしたやつもいるもんだなぁ……。

城主である王族や多くの民を守るため、城門の前で警護にあたっている兵士が珍しい格好をした子供、リンクを注意深く見ていたのだった。

§

「うわ～、見てよナビィ。今、あの大きな門の中にいるんだねぇ」

と、はしゃいでいる様子でリンクは言う。ここはハイラル平原から見えていたそびえ立つ巨大な城門の中。城が目的地のリンク達はこの門を通り抜けている最中だった。

「ちょっとリンク…。お願いだからあまり目立たないようにしてね」

ナビィは周りをキョロキョロと見渡しながらリンクに言う。それもそのはず城門が見てからリンクのテンションが上がりっぱなしだ。コキリ族の住居とは違い、ほぼ人工的に作れた建造物を目の前にして好奇心旺盛のリンクが興味を持たないわけがない。

…たださえ服装だけでも目立っちゃっているに～と思っているナビィの心配をよそにペシペシと何を確認したいのか城壁を叩いている。そしていちいち声を出して驚いていた。

「……あ！！　ねぇリンク、リンクってば！！　早く行きましょ」

何かに気づいたのかナビィはいきなりどうしたの？　と聞き返すリンクの言葉も聞かず、出口へと急いだ。

突然のことでわけが分からないながらも出口付近まで歩いて来たのだがどうしても気になってしまい、どこかソワソワしているナビィに、

「ねぇ、こんな急いでどうしちゃったの？　もうちょっと中にいたかったのになぁ～」

「はぁ～……、あのね…リンクは気づいてなかったみたいだけど入り口の兵士がジッとこっちを見てたんだから～」

まったく気づいていなかったリンクは本当かどうか入り口の方に向けてみると、恐らく自分を見ていたであろう兵士がなぜか上官に怒られているのが見える。

よ～く耳を傾けてみると、

「何をよそ見してる！！　こっちを向かんか！」

張り詰めて声が城門中に響いてきた。

僕を見ていて怒られちゃったのかな…？　でも……ちょっとおもしろいかも…。

怒られている兵士は頭をペコペコと何度も下げながら謝っているのが可笑しく思え、終いには口元を抑えながら小さく笑い出してしまう。

それを見ていたナビィは、今なお、怒られている兵士に気づかれないようとリンクを叱る意味で小突きながら共に先に急いだ。

城門を抜け、正確に建物が並んでいる大通りを抜けると多くの人々が往来し、活気づく広場が広がってる。各々の店舗、あるいは行

商に至る所に点在していた。

こんなに人がいるんだ～。……ん、あれ何だろう？

と、何か気になったのか人混みの中をかきわけて進んで行くリンク。しかし、人の往来が激しく簡単には進んではいけない。

「うわっ！！」

案の定誰かにぶつかってしまい、尻餅をついてしまう。

「おっと！！」

と、相手もぶつかった事に気づく。イテテッとタイル張りの地面に打ったお尻をさすっていると、誰かの手がスッと目の前に差し出されていた。

「いやぁ…すまなかったね、大丈夫かい？」

顔を上げてみると優しい微笑みを浮かべている長髪の青年がいた。リンクは…え…う、うん…と手をとろうとしたのだが転んだ拍子に自分の手が汚れてしまったことに気づき、服でゴシゴシと拭いた。

フフッ、気にすることないのになぁ…と、青年は思っていると先程ぶつかった少年が恥ずかしそうに立ち上がった。

よく見てみると今まで見たことがない服装で、少し不思議に思えた。このハイラル地方では色々な種族がいるのだがどの種族にも見覚えがない。青年は思わず、

「君はここに住んでわけじゃ……なさそうだね。いったいどこから来たんだい？」

と、聞く。すると目の前の少年はキョトンとした表情で自分を見ていた。

あれ……？　やっぱりいきなり聞いたのはまずかったかな？　と、少年に不信感を抱かせたのかと思ってしまい、

「いやぁ～、ゴメンゴメン。いきなり聞いたら失礼だったかな…。僕はね、そこで薬屋を営んでいる『カイル』って言うんだ」

と、まずは自分の自己紹介をする。そしてその青年、カイルはよろしくと改めて握手を求めた。

……それにしてもさっきから隣にいる妖精は何なんだろう？　うちの店にあるのとは違うだろうし……。

そう思いながらリンクと言う少年と握手を交わしたのだった…。

「カイルさんていい人だったね。色々教えてくれたし、親切だったしさぁ」

店の仕事があるにもかかわらず、他の店や簡単な道案内などをしてくれたカイル。自分の店の近くまで来ると、よかったら今度来てみてねと営業の事も忘れずリンク達と別れた。

今、リンク達はある場所に向かっているところだ。それはそうとなぜか上機嫌で足取り軽く歩いているリンクに対し、ナビィは少し不機嫌だった。

「ねぇ、リンク？　私達遊びに来たんじゃないんだよ。……、ハァ～…やっぱり聞いてないし……」

自分の言葉が耳に入っていないのに気づくと思わず、体の底から吐き出したような重～い溜め息をついてしまう。

「…お願いだから1回だけにしてよね……」

と、言うとリンクは浮かれ気分そのままに屈託のない笑顔で答えた。

なによ…、聞こえてるんじゃない！！

心の中でツッコんでしまうが先程の事を考えると声にして出せなかった。

そもそもの始まりはカイルの一言だった。

「…あ！　そうだ！！　リンクはゲームは好きかい？　広場からちょっと逸れてるけど的当て屋があるんだよ」

これがいけなかったのだ。ナビィがマズいと思ったのも時すでに遅し、リンクは目を輝かせてこれ以上ないくらいの喜びの表情を浮かべている。当然ながら、

「うん！！　大好き～。ねね、カイルさん。そのお店の場所さぁ、詳しく教えて～」

と、誰が見ても興味津々だ。喋ろうにも城門の時とは違い、中央の広場に比べれば多少ながら少ないがそれでも広場の一角に建っているカイルの店の前では、なるべく人前でリンクとの会話を避けてきたナビィはただひたすら会話が終わるのを待っているしかなかった。

やっとの事で会話が終わり、カイルを別れた直後にナビィは即座

に路地裏へと誘導する。無言で離れて行くナビィの後ろをどうしたの～と歓喜の余韻を残したままのリンクは着いて行く。そして到着するなり、

「ダメよ。絶対にダメ。目的を忘れたのリンク？　お城に行かなきゃいけないんだから寄り道なんてしてら…れ……」

と、まるで母親のようなお叱りが始まったのだ。しかし、言い終える前にナビィは……えっ…と気づく。

「…グスッ…わかっ…てる…よ…。わかって……ウッ…ウッ…」

膝を抱えてうずくまるように座り込むリンク。そしてとうとう泣き出してしまう。そして結局現状の通り、ナビィが折れる形で渋々行く事になってしまったのだ。

はぁ～ぁ…、結局行くことなっちゃった…。もう！！　あんな顔見せられたらダメって言えなくなるじゃない！！　リンクのバカ！　卑怯よ、まったく…。

と、思っているが結局は許してしまうのはナビィの甘さなのか……いや…それが優しさなのかもしれない…。

広場を抜け、若干ながら人の往来が少ない道に出た所にリンクの目的地はあった。そこは大きな的を看板代わりにしている店、カイルが言っていた的当て屋である。

「ここが的当て屋かぁ。ん～…思ったより小さいお店だったね、ねぇナビィ。でも、ワクワクしてきたし、さっそく中に入ろ～」

リンクはそう言うと自分の言った言葉に対してお～と言いながら店の中に入って行く。ナビィも文句を言いながらもその後を追って行った。

「ん？　おぉ、客か。いらっしゃーい。一回２０ルピーだがやるかい？」

頬杖をついていた店主はリンクを見るなりそう言う。店主のガタいの大きさと人相に内心ビビりながらも、もちろん！！　迷わず答えた。

「オッケ～。では前にある台に立ってくれ。そういえば弓かパチンコは持ってるかい？　なければ貸し出ししてるが？」

「持ってますよ～。ほら、これでいいんですか？」

「あぁ。じゃあ、俺の合図でスタートだからなぁ。用意しろよ～」

リンクは２０ルピー支払うと取り出しやすいようタネ袋を腰に着けている小さなバックから出す。そして、パチンコのゴムのしなり具合を確認すると店主に準備が出来た事を伝えた。

「あ、そうだった。全て当てたら景品が出るから頑張れよ」

と、合図を今か今かと待っているリンクに告げた。

まぁ……、開店以来まだ1人も満点はいないがな…。こんなガキじゃあ…無理だろう…。ククッ…、いい金ヅルになったぜ…。

「いくぞ～。では……、スタート！！」

店主はまだ知らない…。リンクの射撃に関しての腕を……。

～1発目～

「おっ…当たった」

～3発目～

「いいぞ～。その調子だぁ」

～5発目～

「ボウズ、なかなか上手いな！！　だが、こっから難しいぞ～」

～7発目～

「えっ……」

～9発目～

「嘘だろ…！！」

そして最後の的もあっさりと当て、終了のブザーが鳴り響く。フゥ～とひと息入れ、

「意外と簡単だったね。あ…、全部当てたから景品貰えるね！！」

と、隣にいたナビィに語りかけた。一方、店主とはいうと開いた口が塞がらないのか口を大きく開け、呆然と立ち尽くしている。リンクの力量を知らなかった店主はこうもあっさりとやられると思ってもいなかったのだ。その分、ナビィはそうね…と予想がついていたのか店主静かに言葉を返した。

「ん～どうしよう…。もう1回やろうかなぁ…」

えっ！！！　と、店主とナビィは同時に振り向いた。当然ながら満点を取りながら再挑戦をしようとしているリンクに…。

「ちょ、ちょっとリンク！！　話と違うじゃない！！　さっき約束したでしょ！？」

「だってぇ～、景品が出るんだよ。いっぱい欲しいじゃん」

恐らくこのままの調子では1回どころではなく、またしばらく続いてしまう…。そう思い、ナビィは人がいるのも忘れて怒った（的当てのオヤジは激しく動揺していたのできづかなかった…、というよりそれどころでなかった）　案の定ねだり続けるリンク。しかし、

「頼む！！勘弁してください」

的当て屋のオヤジは気づいた。このまま続ければ景品を全部いかれてしまうのではないかと……。それ程リンクの射撃の腕は確かだった。

「ぶぅ～、それじゃつまんないよ。1回…もう1回だけでいいか

らさ、ねぇ…おじさん」

と、いつものように満面の笑みで言う。ナビィは既に諦めており、心の中でもう1回コールに動揺しまくっているオヤジがどうか断るように、密かに応援していたのだ。望みは薄いが……

「わ、わかりました。通常の景品と特別な景品をお渡ししますので、どうか…、どうかお引き取りください！！」

とうとう半べそをかきながらわざわざリンクの目の前まで来て、土下座までしている。そして出されたのは、大きめなタネ袋と……。

§

リンク達が店を出た時には、陽が西へと僅かながら傾き始めていた。しかし、広場はというとその活気は衰えておらず、食材を探す者や飲食店へと出向く者とそれぞれの目的がより一層広場を盛大に盛り上げていた。

そんな広場へと向かう道を歩いていた時をある異変が起きた。

グゥ〜〜ゥ……。

まるで自己主張していると言わんばかりにリンクの腹の虫が鳴いた。

「あ！！　お腹……空いちゃったね。ハハッ」

と、恥ずかしさを笑って誤魔化しながらナビィに話しかける。

……ハァ～、今日のリンクは何かと手間がかかるわね～。

内心呆れながらも、このままお城に行っても何かと問題になる、なによりこの城下町に着くまでちゃんとした食事などリンクは口にしていなかった。それを考えると、

「…そうね。広場に行けば色々あるかもよ。例えば特産品を使ったものとかね」

やはり食事をとることにした。しかし、

「ねね、特産品ってなぁ～に？」

と、特産品という言葉の意味がわからなかったリンクは首を傾げながら聞く。思わず、ガクッと落ちてしまいそうになるナビィ。ため息をつきながらもその意味がリンクにもわかるように教えた。

……あ、あれ？　何だろう、この匂い？　でも、とってもいい匂いだぁ。

ナビィ先生のありがた～い説明を受けているのもかかわらず、ど

こから食欲をそそるような匂いに意識がそちらにいってしまう。それに気づいたナビィは注意しようとするが、

「さ～さ！！　たった今出来たばかりの外はカリカリ香ばしい、中はしっとりフワフワの焼きたてパンを販売中だよ。今ならロンロン牧場産の絶品バターがついてくるよ～」

と、少し年老いているものの大柄な体つきの女性が言う。どうやら宣伝のようだがそれにしても威勢のいい大きな声だ。その声と匂いにつられ、既に何人かは店へと足を運んでいた。

「そう、さっき言ってたロンロン牧場のバターが……って、もういないし！！」

女性の声の方を向いている間にリンクは忽然と目の前から消えていたのだ。だが、先程宣伝していた店に行ったのだろうと予想はついていた。ナビィは急いでその店に向かおうとするが、

「キャッ！！」

悲鳴もままならない程、目の前が突然真っ暗になってしまう。ナビィ自身にも何が起きたのかわからなかったのだが、

「へへっ、こんな街中に妖精がいるとはなぁ。こいつは活きがい

いから高く売れそうだぜ」

走るような足音と共に低い男の声が聞こえてきた。しかも、最悪なことにナビィを売って金を手に入れようとしている。それに聞いたナビィは必死にもがいたがどうやら厚い袋のような物に入れられ、思うままに身動きが取れない。そして、暗闇の中で恐怖が支配し始めた。

リンク…、お願いだから助けて！！　リンク…、怖いよ……。

共に過ごした時間はわずかだが信頼している相棒へと心の中から必死に助けを求めたがその思いは虚しさが残るだけであった。

焼きたてパンを買い求めている人だかりの中、リンクはやっと思いで手に入れたパンを店の前で食べる事にしていたのだが、隣に売り終えたパン屋の女性が座ってきた。どうやら自分に興味を持ったらしい。……まあ、いいか…とそれより早く買ってきたパンを食べることにした。

「どうだい、おいしいかい？　……ハッハッハッ、そんなに頬張ったら喉につまるよ。ほら、言わんこっちゃない」

パン屋の女性はあまりの美味しさでかき込むように食べていたリンクの背中を大笑いしながら叩いている。

大丈夫かい？　と、喉に詰まらせて苦しかったのか激しく咳き込むリンクを少し心配そうに言葉をかけたのだ。

「まったく…急いで食べるから詰まるんだよ。ほら…、これあげるからもうちょっとゆっくり食べな」

と、コップを手渡し、

「何かあったら私に言っとくれ～」

店の中へと消えていった。

よかった…。なんか見られながら食べるのっていやだなぁ。それよりこの真っ白な飲み物はなんだろう？

細かい事を気にしていたのだが手渡さられた飲み物は躊躇することなく口にする。その飲み物は濃厚ながらもどこかほんのり甘くてとても飲みやすかった。

これはパン屋の女性の気遣いである。この飲み物は牛乳なのだが子供のリンクに飲みやすいようにわずかながら蜂蜜をブレンドしてあった。そんなことも露知らずこの飲み物が何なのかわからないままに食べるスピードをあげていったのだった。

フゥー…、もうお腹一杯だぁ。……ん、なんかお腹一杯になったら眠くなってきちゃったなぁ。

ふぁ～あ…と大きく欠伸をするとそのままベンチに横になってしまう。

だが、リンクは大事なことを忘れている。それに気づいたのは、陽もだいぶ傾き始め夕刻がすぐそこまできていた時で、まだ先のことになるのだが……。

クワァ～…よく寝た……あれ…なんか忘れているような……まぁ…いいか…もう一度寝よっと……↑（おいっ）

9話【謎のお面屋】

城下町に夕暮れの光が差し込み、広場から皆それぞれが帰路に行く。自宅に帰る者、店じまいをする者、他の地へ旅するため城門へと向かう者など目的は違えど活気のあった広場から人が去ってゆく。

ただ…1人を除いて…。

§

行方知れずになったナビィに気づいた時は既に1時間以上が経っていた。リンクは急いで広場の入り口付近、最後にナビィと話した場所で通行人などに聞き回っていた。本来ならば人見知りをするリンクがここまでなりふり構わず聞いていたのはそれ程必死だったのだ。

…ナビィ……ナビィ…どこにいるの…ナビィ……。

次第に焦りを感じ始めるリンク。だが、返ってきた答えは皆同じであった。それどころか気味悪がる者や笑う者ともう誰もがまともに相手をすることはなかった。

リンクは走った。だがその場から逃げるためではない。なぜ自分勝手な行動をしてしまったのかという後悔…1人であるという孤独感…そして自分自身への怒り…それらの感情が胸の中を渦巻き、今

すぐにでも払拭たいという一心てその場から立ち去ったのだ。

路地裏…城門前…再び広場に戻っても一向にナビィの姿は行方知れずだった。

その後の事はリンク自身、あまり覚えていない。深い悲しみから来る絶望感でまるで死人のように町をさまよっていた。

誰もが気にかけず、誰もが奇妙な目で見ている。どれほどの時間が経ったのだろう……リンクが着いた先はある廃れた神殿であった。

人気のない忘れられた神殿……後に重要な意味をもっていたことにはリンク自身はまだ気づいていなかった…。

力無く入り口に座り込み、更に生気を無くすリンク…。その姿はいつものリンクからは想像出来ない程である。

……ごめんね…ナビィ…。

…ポタッ…ポタッ…リンクの足下が濡れてゆく。それ以降、地面が乾くことはなかった…。

「……ずいぶんとお困りのようですね…」

まだ精神的余裕がないのか慌てる様子もなく、静かに目の前を見てみるとそこには見知らぬ人物が立っていた。

……キツネ…？？

「いや…違いますよ。れっきとした人間ですけど、それにしても失礼なことをお考えになりますね…」

先程は反応すら起こさなかったが流石に自らの思考が見抜かれている事には驚いた。リンクは何故わかるのか…その疑問をぶつけようと口を開いたのだが、

「まぁ…仕事柄ですから……。そういえばまだ名乗っていませんでしたね。私はこの町でお面などを扱っている店を開いてます、ロギと申します」

そう言うとリンクに対し、軽く一礼をする。話よると日課の散歩がてらにこの神殿に立ち寄るらしいのだが、

「……で、あなたのお名前は？　この町の出身ではなさそうですが……」

「あぁ、はい…。僕はリンクっていいます。コキリの森からきたんだけど…」

コキリ族出身という事に興味を示したのか、細目が若干ながら見

開く。そしてパンと拍手するように1度だけ手を叩いた。

「おぉコキリの森ですか、それは珍しいですね。そうですか……しかし、確かコキリ族は固有の妖精をお持ちになれたはずでは……」

リンクにとって今まではかけがえのない存在になりつつあるナビィ…ロギの不用意な言葉にリンクは落ち込ないはずがなかった。うなだれた姿を見たロギは、

「……ふぅ…どうやら原因はその妖精だったようですね」

と、一息入れて察した。涙ながら…うん……と返事するリンクは今まで起きた事を重い口を開いて伝えていった。

「なるほど…。では、手がかりなしということですか……」

隣に座わり、リンクの話を聞いていたロギは頬杖をしながら考えこむ。

…なんでこの人はこんなに親身になってくれるの？　この人もカイルさんみたいにいい人なのかな…。それとも僕がコキリ族だからなのかな……。

自分の話を熱心に聞き、そして隣で真剣に考えている。そんなロ

ギの行動が僅かながらリンクの心を緩めてゆく。まだ信用しているわけではない…ましてや自分ではなく、コキリ族として見ていたのかもしれない…。だが、痛みにも似た苦痛は着実に和らいでいる。それを証拠にロギに見えない所で僅かの笑みがこぼれた。

ここで余談になるがロギは人の表情や仕草などで相手の心理状況などがだいたいわかるらしい…。

「……わかりました。今回は私達の力をお貸しいたしましょう」

……ん？　私達って？

この場にはリンクとロギしかいないのだが何故か複数いるかのような言葉の意味……リンクは疑問を感じられずにはいられなかった。

しかし、余談でも述べたように表情でどのような心境なのかはわかっていたにかかわらず、ロギは更なる言葉を口にした。

「……ただ2つだけ条件があるのですが…、よろしいでしょうか？」

「……うん…。ナビィが見つかるならなんでもする！！　だから……」

…条件？　一瞬戸惑うがなりふり構わず、ロギの言う条件を飲み、

ナビィが見つかるのならば……リンクはその思い一心にロギに託したのであった。

「では、まずは1つの条件ですが今からここで起こる事は他言無用です。守れますか？」

鋭い目が更に鋭くなるのを見てリンクは少し恐怖を覚える。言葉を発っしずカクカクと頷き、肯定。

「では……」

そう言うと自らが取り出した仮面をつけたロギ。だが、この時既にロギではなかった。

……何あれ…まるで生きてるみたい……。

異質…とでもいうのだろうか…祭りなどで売られているお面や貴族などがつけていた仮面とは全く異なり、儀式…あるいは呪術などに用いらるような程禍々しい存在の仮面だった。

「…ワレニ何ヲ望ム…小サキ者ヨ…」

聞いた瞬間、寒気と鳥肌がたつ。明らかに先程までの物静かに丁寧な口調のロギではなかった。それは凍りつくような冷たい…また

人に恐怖を与える暗い感情のない声だった。

「えぇ～っと…じ、じつはぁ…ボッ…ボクの相棒がいにゃ、いなくなってしまったの…です。探したんですけど手がかりがなくって…」

動揺していたことで慌てたり、噛んでしまうがナビィのことを思い出すと違う意味で落ち込いてきた。

「ソレガオマエノ望ミカ？　……ヨカロウ…」

思わず、エッと口走ってしまう。意外にも早い答えにリンクは驚いたのだ。

「……オマエノ相棒…ナビィハ…オマエモヨク知ッテイル青年ノ所にイル。……ソレハ…」

まだ会話の途中だったがリンクは既にその場にはいなかった。ナビィがいる場所がわかった時点で、もういてもたってもいられなかったのだ。

「おぉ～～い、リンクゥゥ君。２つ目の条件は私のお店で話すから後で来ておくれぇぇ～」

後ろから聞こえてきたのは最初に出会った時のロギの声である。急ぎながらはぁ～いと大きく声を出し、手を振りながら神殿を後にした。

「まったく…お礼を言わず行ってしまうとは……。まぁそれ程必死に探していたんでしょうね。

……それより、どうやらあの子の事…気にいったみたいですね」

リンクが去った後、今だ神殿の前でたたずんでいるロギ。遠くから見れば独り言をしゃべっているようだが内容からすると誰と会話しているようだ。そして、

「いずれあいつも手の内に……なぁ君もそう思うだろ…ムジュラの仮面……」

怪しく鋭く光る眼光はリンクの接していた時とはあまりにも違っていたのだった……。

§

「ん～～、さぁ～てそろそろ店じまいでもしますかな～っと」

トン…トン…トン…。

店内には誰もおらず、ノック音だけが店の中に響いていた。

「……？？　なんで入って来ないんだろう？」

本来ならばノックなどする必要もなく、ただ入ってくればいいのだが今日最後のお客になるであろう外でノックしている人物は今だ店内に入ってこない。そればかりか扉を叩く音が大きくなってきていた。変な客でもきたのかな？　と少々苦笑いで扉に向かっていった。

何気なく挨拶を入れて扉を開けるとそこには昼間にあった少年が息を切らし立っていた。

「カイルさん！！」

昼間のオドオドとしていたリンクとは違い、何か張りつめた顔だ。状態からただ事ではないと判断したカイルはとにかく店の中に入るように促し、早々と札をｏｐｅｎからｃｌｏｓｅに変えた。

「一体どうしたんだい？　そんなに急いで来て、俺に何か用事でもあったのかい？」

今だ落ち着かないリンクを椅子に座らせた。コトっと目の前に水を置くと相当喉が渇いていたのかリンクは目の前の水を一気に飲み干した。

…これで少し落ち着けたかな……。

リンクの身を案じながら見ているカイル。その願いが通じたのか先ほどより落ち着きを取り戻したリンクに訳を聞くのだった。

「あのね、ここにナビ……ん～ん…妖精が来なかったですか？」

知り合いだという青年…まさしくカイルさんしかいないと推測したリンク。ロギの会話も途中で投げ出し、ここに来たわけで……確信にも似た期待をもっていた。

「妖精？　妖精ってあれじゃなくて？」

カイルが指差す方向には確かにビンに入った妖精がいた。正確に言えば、妖精の魂だが……当然ながらナビィではない……。リンクは大きく首を振った。

「ん～、だとすると分からないなぁ…」

それを聞いて、ガックリと肩を落とす。最後の手がかり…ロギの言葉を信じてカイルの所へ来たリンクにとってショックは大きい。再び手がかりのない状態となるからだ。

「あ！！　でも、今日すごい元気な妖精が入荷したんだよ。なんでも…売ってきた客が手に負えないとかって……」

「それだ！！　その妖精ぜひ見せてください」

手に負えない……そんなじゃじゃ馬な妖精なんてナビィしかいないと本人いたら間違いなくぶっ飛ばされるような考えだが……今度こそ確信するリンクだった。たまらず机に額をぶつかるのでないかと思わせるくらいに頭を下げた。

リンクが頭を下げるまでもなく、もちろん笑顔で了承したカイルは店の奥へと消えていった。

ナビィに会えるかもという期待で少し興奮気味ではあるが普段通りの落ち着きを取り戻したリンクは改めて店を見渡して見ることにした。薬屋というだけあって家庭で使われる医療薬や旅先のトラブルで使うような治療薬など薬類だけでも多種に至る。

……あ…、ロンロン牧場の牛乳だ…。

見つめる先にはロンロン牧場直営の札が張ってある牛乳が置いてある。隣に目を移すと魚…次は青い炎…挙げ句の果てにはビンの中

に大量の虫が詰まっている物もあった。

ハハッ……虫って…カイルさん…。

なぜ虫が置いてあるのかイマイチ理解できなかったリンクには苦笑いをするしかなかった。

椅子に座り直した時であり。奥から聞き覚えのある声がドンドンと近づいてくる。

「…ンクゥゥ〜…リンクゥゥ〜！！」

「あ！！　ナビィ！！　よかったぁ〜…ごめんね、僕のせ……ブフゥ！！」

約１５０キロの球（ナビィ）がリンク選手の右頬に直撃！！　リンク選手のけぞったぁ！！　おぉ〜とダウン！！　壁際まで吹っ飛んだ！！

感動の再開なるはずがリンクにとっては悲劇となった。

「来るのが遅いのよ！！　助かったからいいものをこのまま私がいなくなってたらどうするつもりだったの！！　あの時リンクが……」

今まで鬱憤を晴らすかのような息つく間もなく喋るナビィ。理不

尽なダメージを負うリンク、直後は訳が分からず戸惑ってはいたが元気そうなナビィを見ていた。

「ちょっとリンク！！　聞いてるの！？」

何か気づいたナビィは興奮冷めやまぬそのままに強めの口調で問いただす。いつの間にか俯いていたリンクには何も反応がなかった。

…ちょっと言い過ぎだったかしら……。

多分ナビィが思っている以上に言い過ぎだとは思うがリンクもリンクで少し変である。ナビィは気づいてはいなかったが微かに口元が微笑んでいる。もう1人はリンクがどんな心境かは気づいてはいたが……。

ナビィは俯いた姿を見て急激に興奮が冷め、逆に心配なってきていた。おろおろと頼りなさそうにリンクの元へ飛んでゆく。

「……リン…ク…？」

リンクは静かに泣いていた。そんな姿を見ると、…え…え…と戸惑うあまり、ろくな言葉も出せずにいた。

何故泣いていたのか……最近ではあるが普段から必ず一緒にいたナビィ……いて当然という慣れでわからなかったがナビィの存在の大きさ…いつの間にか心の支えとなっていたことにいなくなったこ

とで初めて気づいたリンク……そして…今…この一緒にいるという安心感…孤独感からの解放…それらが涙となって溢れたのだった。

「…おかえり……ナビィ…」

嬉しさを噛みしめ、このナビィがいる日常が日常である喜びを泣きながらも最大の笑顔で答えたリンク。

しばらく何も言えなかったナビィ。自分に非がないとはいえ、多大な心配をかけてしまったことにようやくきづいたのだ。そして、

「……うん……ただいま…リンク…」

と、素直に口にすることができた。お互い…次第に口元が緩み、微笑ましい雰囲気になっていた。

……が、ある人物の一言でそれはぶっ壊れてしまう。そうそれは、

「へぇ〜、リンクの妖精ってしゃべるんだぁ」

今更！！　と思うが珍しそうに突拍子に話すカイル。互いに気づいた時には既に手遅れだ。

「『あ！！』」

…空気を読もうね…カイル……（作者）

§

「そうだったんだ。コキリの森から来たんじゃその服装も見たことないわけだよ」

今まで起きた事、旅の理由や目的などカイルにおおまかに説明をするリンクとナビィ。カイルは初めて会った時の疑問がようやく解けたことで妙に納得していた。

「で、今からお城に行ってもしょうがないから今日はウチに泊まって早朝行けばいいと思うよ。早朝なら警備の交代なんかで手薄になるはずだからさ」

「そうなんですか…。カイルさんって物知りなんですね」

いつもリンクと喋る時の強めの口調とは違い、上品になおかつ、おしとやかに話すナビィ。

僕としゃべる時とは全然違うし……なんかナビィじゃないみたい…。

内心笑い気味のリンク。ナビィに睨まれたのは言うまでもないが……。

「じゃあ、仕入れに行く時起こし行くからそれまで空き部屋で寝てなよ。2人共けっこう疲れてるみたいだからすぐに部屋案内してあげるよ」

「ありがとうございます。何から何までご迷惑かけてしまって……カイルさんって優しいですね」

「え……そんなことないと思うけど……。じゃあ、部屋に布団持ってくるから先に行っててていいよ。場所はこの奥だからさ」

…ナビィもカイルさんみたいにいつも優しかったらいいのに〜…。

ボカッ……リンクはナビィに小突かれたのは言うまでもないが…。

１０話【月夜の歌声】（前書き）

なんだかんだいって１０話まできましたね（笑）今まで読んでいただいた皆さんに感謝です。そしてこれかもよろしくお願いします。長くなりましたが本文の方へどうぞ。

10話【月夜の歌声】

ゴクッ…ゴクッ……プハッ…。

「やっぱり早起きして飲む牛乳はおいしいな～。…んー……、もう一口…」

ここはハイラル城へと続く山道。大事に飲んでいこうと少しずつのつもりが我慢できずに半分以下に…。既に大好物となりつつあるロンロン牧場の牛乳はカイルが寝ぼけ眼のリンクに目覚まし代わりにと持たせたものだ。

カイルさんには色々と感謝しなちゃ…。こうやってまたリンクといられるのも、上手くいけば今日中にはお姫様と会えそうなのも…。

ハイラル城には当然兵士がいる。街にもちらほらと見かけるが比べてものにならない。それこそ城内への侵入など不可能に近い。普通に行っても追い返されるのは目に見えているし、侵入するならば確かな情報と正確な侵入経路が必要になる。

こんな詳しく知ってるってことは…カイルさんて昔はヤンチャだったのかな…。ちょっと意外～、フフッ。

話によると幼少時に好奇心で何度も忍び込んでいたらしい。流石に城内まではないが未だ失敗はないという。聞いた時はすげ～…と

2人は感心していたが考えてみるととんでもないことをやっていたカイル。ナビィがそう思うのも仕方がないのかもしれない…。

だが…失敗すれば手薄の警備も全て台無しになってしまう。…ヨシッ！　まだ先は長いが気を引き締める。すると…横でゲフッ…と下品な音をたてたリンク。当然…ナビィは気合いをリンクに注入したのだった。

痛い一発をもらったリンク…その原因のナビィはひたすら山道を歩いている。城まではほぼ一本道になっていて暗闇の中でも迷うことはなかった。

「ねぇ…ナビィ。同じ森でも全然違うんだねぇ～」

平坦な道のりのせいか…退屈で飽きたリンクは見回していた。それにより、自分の故郷…コキリの森とは違うことに気づいた。

リンク達が通っている森は人々の手で作られ、そして管理されている…、いわば人工林に近かった。

広葉樹など多く、また花を咲かせる樹木なども規則正しく並んでいる。恐らくその各々の季節が来れば、この地に多くの人々が訪れるだろう。

それに対してコキリの森は原生林そのもので本当での意味の自然である。人の手を拒むかのようにうっそうと生い茂る大木の数々。何故コキリ族の存在がごく少数にしか知られていないのも納得がいく。

人間にはできない共存がコキリの森ではうまく成り立っているのかもしれない……今亡きデクの樹様の守護があったことも言うまでもないが……。

……♪～♪♪～♪…。

森の出口に差し掛かかった時、２人の耳にはたしかに聞こえてきた。

「…リンク、聞こえる？　すごいキレイな声よねぇ～」

「うん…聞こえるよ…。なんか子守歌みたい…」

それは静寂な月夜…湖のほとりでほんの僅かな水の音を聞いているようだ。それ程繊細で透き通った歌声である。

…あぁ、いつまで聞いていたいなぁ……ん？…あっ！！

聞けば聞く程うっとりとした表情なナビィ、ふと隣を見てみるとあることに気づく。

妙に静かなリンクはフラフラと目をこすっている。そして心地よさそうに眠りの世界へと今にも寝そうになっていた。

「ちょ…ちょっとリンク…！　何寝てんのよ、早く起きなさいって」

と、既に寝息をたてているリンクに最初はボソッと小声だったが、

「リンクゥ！！　起きろ！！　またぶっ飛ばさたいの！？」

今では森中に響き渡る大声である。一方、寝ている張本人はというと、

「ほぇ……う～ん…カイルしゃん…そんなにご飯食べられないよう～……ゲフッ」

と、完全に寝ぼけていた。オマケにまたもや下品な音付きで…。

……ブチッ……。

おぉ～っと燃えているぅ～。ナビィ選手が真っ赤に燃えているぅ～。そして助走つけて……イッタァ～。魔球さながらに真っ赤に燃える球（ナビィ）が寝ているリンク選手に向かっている～。さぁ～果たしてリンク選手の命運は……。

「え……ここで何しているんですか？」

§

「そんなに私の上手かった？　ちょっと嬉しいなぁ」

「うん、マロンちゃん…すごい上手だったよ。僕…思わず寝ちゃったもん」

と、後頭部に手を置いて笑う。幼いながらも大人さながら美声を発していた少女…マロン。

可愛いなぁ…リンクにそう思わせる程頬を朱に染め、恥ずかしそうにしていた。

「ところでマロンちゃんはどうしてここに？　こんな朝早いの1人いるし、何かあったの？」

今更だが気づく。確かに早朝だとしても少女1人でいるのもおかしい。今まで忘れていたのか…うん……実はね……と、マロンは語り始めた。

ロンロン牧場……言わずと知れたハイラル一の牧場でここで穫れる牛乳はこれまたハイラル一の名産品として多くの人から愛されている。年代…種族から支持を受け、ついには王族にまで献上するまでになった。

朝一番の最高の牛乳を献上するわけで今日もここハイラル城に来たのだが中に入ったマロンの父さんが一向に出てこないのだという。

「そうだったんだ……。ここで一人ぼっちでマロンちゃん…かわいそう…」

「アハハッ！　そんなことないよ。毎日のことだし……父さんはきっとお城のどこかで寝てるのよ……。困った大人よね…、あ…でも、さっき寝てたリンク君はまだ子供だけどね、フフフ」

……う…痛いところついてくるなぁ…。

「でも、心配してくれるなんてリンク君…優しいね…ありがとね」

まだ数分の出会いだが、コロコロと色々な表情を見せるマロン……同じ年代と話すのはサリア以来だった。嬉しい言葉を言われ、恥ずかしかったが全然悪い気などしない…、そして話すのが楽しかった。

マロンちゃんのために何かしてあげたい…その思いから、

「じゃあさ、僕も用事があってお城に行くから、お父さん…だっけ…？　一緒に起こしきてあげるよ」

「え…ほんと？　いいの？」

「いいよ～♪　マロンちゃんのためだし、お礼にまた歌声…聞きかせてね」

「え……、うん！！　じゃあ約束だね」

リンクとマロンはお互いに笑顔で約束を交わす。短い時間ながらも打ち解けあう2人の間には微笑ましい雰囲気が醸し出した。そしてリンクはお城へ向かって行った。

リンク君……あ！！　そうえばさっき…もう1人の声がしてたけど……誰だったんだろう…。

答えはナビィです……。忘れ去れていたが恥ずかしさのあまりリンクとマロンの会話の最中ずっと上空に逃げていたのだ。先程とは違う意味で真っ赤に燃えて……。

この日の広場では明朝の空に浮かぶ、未確認飛行物体の噂で持ちきりとか……。

§

「冷たいよ……服の中までグチョグチョに濡れちゃったし……うぅ…」

なんとか城の裏側までたどり着いたリンクとナビィ。来る途中に水路を通らねばならない所があり、嫌々ながらここまで来たわけだ。

濡れそうな時だけ服から出てさぁ…ズルいよ…ナビィ…。

濡れるの拒否したナビィはこの時だけは見えないように飛んで難を逃れている。

そんなことも露知らず、自らはカイルの手助けに感謝しつつ、

「さぁ…先を急ごう。もう朝日が上ってきてる……警備がまだ手薄の朝の内に早く行きましょ」

木陰で何かブツブツと言いながら濡れた服を絞っていたリンクに言う。城内へと侵入できる場所をしばらく探索していると、

「ウガ〜……ゴォ〜……ガ〜…」

まるで獣みたいなイビキが聞こえてきた。

こんなイビキを出してるのに見張りはなんで見にこないんだろ？…。

それ程、地響きのような音で思わず、耳を塞ぎたくなるくらいだ。

リンクが不思議に思っていると、

「いらっしゃ～い…ムニャ……ウチの牧場は…楽しいだ～よ…」

！！　……びっくりしたぁ…と、起きてるのではないかと思わせる程はっきりとした寝言だった。

少々驚かせられぱっなしだが恐らくマロンの父親でだろう。

…うわわぁ……こんなにヒゲ生えてる～。

寝息と一緒に動いているフサフサのヒゲを見ているリンク。ちょっとイタズラをしたくなったがここは我慢…さっそく起こしにかかった。

……コケッコッコ――！！

マロン特製目覚まし鶏（おもちゃ）……使ったリンク本人さえ驚いてしまう程の音だった。当然ながら、

「ウィィ！！！　……なんだーよ？　人がせっかく気持ちよく寝てたのに……」

奇妙な声を出して飛び跳ねて起きる。それより、独特の口調が気になるが、

「あ…、やっと起きた。えぇ～っとおはようございます」

「あぁ…おはよう……って、お前…誰だーよ？」

礼儀正しくまずは朝の挨拶をするリンク。一応見当はついていたが

「僕はリンク。おじさん……ロンロン牧場の人？」

念のために聞いてみた。

「そうだーよ、オラがロンロン牧場の牧場主タロンだ」

その威厳あるヒゲを揺らしながら自慢気に話していた。どうやら牛乳を届けたのはいいが眠くなって寝てしまったらしい。

朝早いのはわかるが……マロンの言う…困った大人だ。

「…え？　マロンがオラを探してた？　……し、しまっただーよ！！　マロンをほっといたままだーよ！！」

そう言うとみるみるうちに青ざめてゆくタロン。尋常ではない汗

をかき、多少足が震えだしているのを見ていたリンクはどうしたの？　と声をかけようとするが、

「また怒られるだーよ！！」

と、急いで城の外へ駆け出して行った。大人を慌てさせる程のマロンの怒り……。

マロンちゃんって…一体……。

11話【…神々に愛されし者…】

遥かなる時代…まだ名も無き地に偉大なる三大神が降り立つ……その各々の力により…紅き大地…蒼き空…新緑が育む大自然が創造されていった…。

後にハイラルと呼ばれるこの地に…数多の生命が宿る時…三大神…その役目を終え…自らの国へと去り行く…。

三大神により…残された物…聖なる三角形（トライフォース）…神々の力が宿りし…神聖なる象徴…。

人々はこの出来事を崇め…神話として称える…。

…しかし…数多の時が過ぎ…神話は伝説となり…いつしか忘却の彼方へと葬られる…。

平和に慣れ親しむ人々……だが……そう遠くない未来に暗黒の世…黒き雲がハイラルを覆い隠す時が迫る…。

…それを止めるべく…神々の寵愛受けし子…この地に生をうける…。

だが…闇に対抗すべき…神の子…あまりに幼すぎた…。

同じ時…勇者の素質を用いる者…現る……そして……鍵を握りし3人……ハイラルを統治する王の城にて…今まさに…交わりし時…

来たる…。

§

ゴォーン…と重厚でありながら聞く人を拒まず、壮大な鐘の音色が城中に響き渡る。それはリンク達がいる中庭にも……。

厳重な警備網を抜け、草木、花々が咲き乱れる中庭に来たのだがそこには警備兵らしき者はおらず、小窓から何かを覗いている少女…ただ1人だけだった。

……え…。

何かの拍子でこちらを振り向いた少女…目的の人物であることはリンク達はすぐに理解した。だが、絶句しているリンクは見つけた事では言葉を失っていたわけではない。

「！！　あ、あなたはだれ…？　それにどうやってこんな所まで…」

少女もこちらに気づく。声量が小さくとも、少し離れた場所にいながら穏やかで澄んだ声ははっきりと聞き取れた。しかしながら、なんと言ってもまだ幼いながらも造形美のような顔立ち…高貴とも言えるオーラは先程からリンクを見惚れさせてる。

見知らぬ人物に驚く姫、その存在感に圧倒されているリンク、共

に沈黙が続いていたのだが、

「……あら？　それは…妖精！？　それじゃ、あなたは……森から来た人なの？」

少女はナビィに気づくと駆け寄ってくる。うわわ…と言葉を発していなかったリンクも流石に自分を隅々まで見られていては恥ずかしい限りだ。

一通り見終わると少女は尋ねてきた。……しかし、少女が発したある言葉でナビィに不可解な疑問をもたらした。

「それなら…森の精霊石を持っていませんか？　緑色のキラキラした石でこれくらいの……」

……コキリのヒスイは誰も知らないはず…それが王家の者でも…なんで…？

コキリのヒスイと言えば森の精霊石…デクの樹様の言わば、命そのものである。

まだ答えを導き出せないでいたナビィをよそに何の疑問も持たず、素直に…こ、これの事？　森の秘宝とも言える精霊石をリンクは簡単に差し出していた。

「フフフ…やっぱり！」

先程まで石の大きさを表していた手は確信を得たのか大きく握りしめる。つい先程までの不安の顔は消え失せ、今は満面の笑みに近い表情をしていた。

流石のナビィもわけが分からず、元から状況を把握できていないリンクと顔を見合わせてしまう。

「……私…夢で見たのです。このハイラルが真っ黒な雲に覆われてどんどん暗くなっていくのが……」

言葉を続けるにつれて表情に陰りを見せる。これが神の恩恵…信託なのかと2人はそのまま聞いている。

「ですが…そのとき一筋の光が森から現れました。その光は、雲を切り裂き、大地を照らすと……妖精を連れて深緑に輝く石を掲げて…人の姿に変わりました。それが夢のお告げ…そう…あなたが夢に現れた森の使者だ…と」

「え…えっ、え〜!?　それって…ぼ、ぼくの事なの?」

自分の事だとは考えもしなかったリンク。突然の事でただ驚くしかなかった。リンクの反応が予想通りだったらしく、クスクスッと微笑ましく頷いる。

「あ…ごめんなさい…私……夢中で……。まだ名前もお教えしていませんでしたね。私はゼルダ…このハイラルの王女です。……あなたの名前は…？」

「あ…はい！　僕はリンク。で、こっちナビィだよ」

「リンクとナビィ…ですね……では、リンク…今からこのハイラル王家に伝わる…聖地の秘密をあなたにお話しします。誰にも言ってはいけませんよ？」

リンクが頷くとゼルダは静寂に包まれる中、語り始めた。

トライフォース…その力により、手にした者の願いを叶え……光ある者ならば平和が訪れ…もし…闇なる者が手に入れれば世界は混沌と化す……それを恐れた賢者達…トライフォースを聖地へと封印したのだ……そう…聖地には邪の者が立ち入れないよう……その後…その場所には神殿を建ち…偉大なる三大神を未来永劫…崇めた……数多の時が流れようとも……。

「そう…時の神殿と呼ばれる地には聖地への入口があるのです。でも…その入口は時の扉と呼ばれ、強固な石壁で閉ざされています。そして、その扉を開くためには３つの精霊石を集め、神殿に納めよ…と伝えられているのです」

「……んじゃ、これがその1つなの？」

そう言うと再びコキリのヒスイを差し出す。はい…と寂しげに頷き、更に言葉を続けてゆく。

「ですが…もう1つ必要な物……言い伝えと共に王家が守っている宝物…それは時のオカリナです。

3つの精霊…時のオカリナ…全て用いた時…聖地への扉が開かれる……と…。

これが王家の言い伝えなのですが…よくわかりました？」

……全然…と思っているのにも関わらず、とりあえずうんと頷く。難しい話が苦手なリンクにはもう一度聞こうという、気力はなかった。要するに面倒くさいと……。後でナビィに無理やりもう一度聞かされるのは言うまでもないが…。

理解してくれたと思い、大いに喜んでいたゼルダは、ハッと何かに気づく。

「あ、忘れていました！　私は…今、この窓から見張っていたのです。夢のお告げである…もう1つの暗示…黒き雲……それがあの男…」

その場から少し離れ、リンクを先程まで見ていた窓の方へと誘う。言われるがままに覗いてみるとそこには王の謁見の間が広がってい

た。

…え～っと……あれ？…いないなぁ……あっ！！

入口よりコツッ…コツッ…と足音をたて、その人物は現れた。軽装備ながらも重量感漂わす漆黒の鎧。鎧の下からでもわかる…筋骨隆々とした肉体。なにより、

「そうです…。視界に入る者全てを震え上がる程の鋭い目つきの男こそ…西の砂漠から来た…ゲルド族の首領、ガノンドロフ…」

ぷるぷると両手を握りしめ、噛み締めるように話す。負のオーラとでもいうのだろうか…ガノンドロフから何かドス黒い雰囲気が漂う。謁見の間にいた兵士もその雰囲気に飲まれ、畏怖の感情で支配されている。

それはリンクも同じだった。全身が硬直し、金縛りにあったかの如く、その場から動くことさえできないでいた。

「今はお父様に忠誠を誓っているけれど、きっと嘘に決まっています。ハイラルを覆う黒き雲…あの男に間違いありません！」

！！　まだ幼いリンクには酷な事だったかもしれない…。叫びに近い声で話していたゼルダのせいでガノンドロフの意識がこちらへと移す。殺気にも似た邪のオーラ……一点に集中してリンクに向けられては腰が砕けようにその場に座り込むしかなかった。リンクの

行動を咄嗟に身を隠したと捉えたゼルダは、

「どうしたのです？　気づかれしまいましたか？　構うことはありません！　今は私達が何を考えているか……わかりはしないのですから！」

王女らしからぬ迫力だった。…いや、自らも畏怖を感じており、それを払拭するためだったのかもしれない……。

……フッ…。

その光景を静観していた者…何を考えていたかは誰も知る由もない……。

§

「…そうです…。お父様にお話しても信じてもらえませんでした…」

お互いに沈黙が続いた後に元の状態に戻りつつあるリンクはある疑問をぶつけた。

ねね…知ってるのは僕達だけなの？　と…。しかし、これが更にゼルダを表情に陰りを見せる事になってしまったのだ。

「でも…私にはわかるなのです……あの男の悪しき心が……」

今にも泣き出しそうに言う。幼いとはいえ、親に信じてもらえず、マズいことを聞いてしまった事と今のゼルダの表情からわかる悲しみにリンクは心を痛める。

「…狙いはおそらく聖地に眠るトライフォース…。ガノンドロフは西の果てより、このハイラルを……いえ、この世界そのものを我が物にしようと…」

流石のリンクでもそれが何を意味するかはすぐにわかる。

世界の終わりと…。

「…リンク…今ハイラルを守れるのは私達だけなのです…お願い…私を信じて…」

と、細々した声だった。だが、それよりもリンクの目がいったの自らからを抱き込むように震えながら泣いているゼルダの姿である。

夢とはいえ、あのガノンドロフという恐怖…親にも信じてもらえず、その時は刻々と迫る不安…それをリンクと同じ年で1人耐えていたのだ。

……信じてあげよう…それに…この子の助けになりたい…。

それは純粋にそう思う。決して夢のお告げでとか勇者としてではない。考えてみれば、ゼルダとリンク…住んでいた環境は違えど、どこか似ている。コキリ族の中で距離を置かれていたリンク…同い年の子など見当たらず、皆が王女として接する状況にいるゼルダ…。

だが、リンクはサリアがいた。いつもリンクを気にかけてくれ、笑顔を絶やさなかった優しいサリアの存在はとてつもなく大きかった。

無意識だったかもしれない。自分と照らし合わせていたリンクは、

「…うん……その言葉信じるよ…。僕の大切な友達がよく言ってたけどさ…信じる事に意味がある。意味があるからこそ分かり合える。分かり合えるから信じ合えるって…。だから、まだ君とは出会ったばかりだけど君も僕を信じて待ってて……」

「リンク……。ありがとう、私…リンクを信じて待ってるね」

初めてゼルダは王女としてではなく、1人の女の子としてリンクに話しかけられている。そこには僅かだが分かり合えた2人がいた。

「リンク…あなたが来てくれて本当によかった……あの恐ろしい力を持つガノンドロフにはトライフォースを絶対に渡してはいけません。時のオカリナもリンクが帰るまで私がなんとしても守り抜きます。　だから…残る2つの精霊石を見つけてください。そうすれ

ばきっと…きっとあの男をも退けられるでしょう」

そう言い終えると、小走りでどこかへと消えてゆく。

あれ…どこか行っちゃった…。でも、あの服で走ったら転びそう……。

リンクの思いもよそに帰りも同じく小走りで来たゼルダは、

「ハァ…ハァ…お待たせ…しました。リンクにこの手紙を渡しておきます。きっと役にたつはずですから」

ほんの数分なの間にだいぶ息をきらしているゼルダが手渡しのは直筆サイン入りの手紙だ。

うわ…字うまっ！！　でも、僕には上手すぎて全然読めない……。

唯一わかったことは王族に使える兵士や王族に関係を持つ者達に顔がきくって事だけで、詳しい内容は後からナビィに聞かされた。

フフッ…とゼルダに笑われているのもしらず、手紙を逆さまにしたり、ジーッと顔を近づけて必死に読もうとしてリンクに音もなく、近づいてきた者が……。

「うわっ！！」

驚くのも無理もない。その人物は既にリンクの背後に立っていた。

「リンク…安心してください。城の外までこの者が案内します。」

「私は影の民であるシーカー族のインパ　。ゼルダ様の盾となりし者」

いやいや…後ろで自己紹介されても……。

たしかに…。ゼルダもやれやれという表情でインパをこちらへ来るよう手招きしている。初対面ながらいなきりの天然を見せるインパ。だが、自らの言葉通り、女性ながら鍛え抜かれた肉体が盾という存在を物語っている。

ゼルダの隣に立ち、気を取り直して再び自己紹介の後に、

「勇気ある少年よ…新たな旅へ向かうのだな。私の役目として森の使者に1つのメロディを授けることだ。このメロディは、古来より王家に伝わる名も無き歌…私がゼルダ様に幼き頃より、子守歌としてお聞かせ申し上げていたが…私はこのメロディに不思議な力を感じるのだ。少年よ…その両の耳で…心して聞くがよい…」

♪～♪♪～♪～♪♪～……。

名も忘れ去られるくらい…古来より王家に伝わるメロディ…。だが、高貴といった神々しいわけではなく、みじかでありふれるとても温かい曲調だ。聞く人の耳ではなく、心に響き、自然に引きつけられる…もしかしたらインパの言っていた不思議な力とはこのことかもしれない。癒やし…と言う言葉が似合うメロディ……ゼルダの子守歌……。

リンクは心に深く刻み込みながらオカリナで何度も…何度も復唱していった　。

【人物紹介～その1～】

～リンク～

言わずと知れた物語の主人公。デクの樹様、ゼルダ姫から勇者と言われているが本人に今だ自覚なし。普段は楽天的で気ままに行動起こすが打たれ弱い事も多々あり。
戦闘では、気後れしてしまいがちで比較的安全な遠距離での攻撃を得意とする。だが、対ゴーマ戦で見せた剣技はリンク自身もわからない…というか自覚すらしてないのかも…。

～ナビィ～

もう一人の主人公と言っても過言ではない程の重要なキャラクター。リンクの相棒として冷静な判断力、確かな知識をもって幾多の困難から導く。
強めな口調ながらいつもリンクを気遣い。（たまに暴走あり）リンクの涙と笑顔が弱点…かも？

～サリア～

コキリの森の住人。幼い頃から共に過ごしてきたリンクの良き友であり、良き理解者。他のコキリ族とは違い、どこか不思議な雰囲

気を持つ。リンクとは……？？？

～ミド～

コキリの森の住人。コキリ族の中でグループを持ち、そのリーダー格。なぜかリンクには厳しい態度をとる。

～デクの樹様～

いにしえより存在する森の長にしてコキリ族の守り神。ハイラルの未来をリンクに託し、その長き時を終える。

～カイル～

城下町の薬屋。その人柄から多くの顧客を抱える。人情味溢れるお兄さん的存在。

～ロギ～

城下町のお面屋。様々なお面を取り扱い、なかには特殊な物も……敬語を多用し、物静かな様子だがリンクが去った後の妖しき一面も持つ、謎多き人物。

〜ゼルダ〜

ハイラル王家であり、神々に愛されし姫。幼いながらも夢のお告げなど神の恩恵の末端を見せる。思慮深く、国を思う気持ちは強いが1人の少女として感情も……。

〜インパ〜

シーカー族の生き残り。ゼルダが生まれた時より、護衛や世話係としたボディガード的存在。ちょっと抜けている所があるがゼルダにもっとも信頼されている人物。

〜アシュド〜

今だ謎多き人物。わかっていることはコキリの森にいたことだけ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5624g/

ゼルダの伝説　時のオカリナ

2010年10月8日22時50分発行